
東方友造録

皐月二八

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方友造録

【Nコード】

N7762W

【作者名】

皐月二八

【あらすじ】

前世の記憶を持ったまま、東方の世界にやってきた（本人は東方知りません）青年、雨後 常陸。“持つべきものは友達”をモットーとする彼は、新しい世界でも友達をたくさんつくろうと意気込むが、記念すべき一番最初の友達が、トンデモない存在だった！？とある二人がおくる、何の輝きも無い物語、ふらふらと始動！

第一話 やって来て雪下の洞窟（前書き）

短編作品を練り直して長編として投稿しました、皇月二八です。
ゆっくり気長にやっています。

第一話 やって来て雪下の洞窟

雨後！ 雨後巡查！

「ぐっ……」

常陸……しっかりしろ！ 常陸！

「あうぐ……なんだ、畜生……」

頭を押さえ、俺は顔をあげた。

「あ……？」

周囲を見渡す。

森。

岩。

雪。

森というよりは原生林タイガと表現した方が適切な空間だった。

針葉樹林が…… あれは、榎松トドまつか、それとも蝦夷松エゾまつか？ よくわからないが、そんな木が規則的に並んでいる。

見上げる程に高い木。

二〇、いや、四〇メートルは下らないだろう。

その時になって、漸く俺は自分がうつ伏せで倒れていたことに気付いた。
しかも、雪の中で。

立ち上がり、俺は自分の身体を見下ろした。

「……………何だ、これ……………」

それは、見たこともない着物を着ている自分だった。一瞬、本当に“俺”の身体かと思ったが、すぐに気付く。

服装こそ見覚えがないが、どう見ても俺自身の身体だ。

着物は……………浅葱色あさぎとでもいうのだろうか。緑のような藍色あいなほのような色だ。

着物の良し悪しなど知らないが、着心地からしてそれなりに上等なのだろう。いや、俺の身体には安物の方が合うだけのことかもしれないが。

が、俺は　　。

「俺は……………?」

そつだ、俺は……………思い出した、俺は警備艇に乗って、仲間とともに密航船を発見して……………そして……………。

「何処だ、此処……？」

不思議なことに、雪が積もっている中を着物姿でうつ伏せになっていたにも関わらず、体は全然冷えていないし、体調も変化ない。服装については一先ず置こう。

ていつかそもそも、此処は何処だ？

針葉樹林……まさか、アラスカかシベリアにでも来ちまったのか？
馬鹿げている。

俺の所属は名古屋水上警察署船舶課だ。管轄区域は名古屋港内と港区。

仮に警備艇から落ちて漂流したとしても、どうやったらアメリカやロシアに流れる羽目になるんだ？

しかも、仮に漂流してどっかに流れ着いたんなら、俺の身体は浜辺にでも打ち上げられているのが普通じゃあないか？

四方八方見渡しても、針葉樹林が広がるだけだ。

俺は地理には疎いが、幾らなんでも浜辺のすぐ近くに大針葉樹林が広がってはいないことくらいは想像できる。

「ん？」

俺はふと足元を見ると、見覚えのあるポストンバッグが無造作に置いてあるのが見えた。

間違いない、俺のだ。

取り敢えず、ポストンバッグの中を漁る。

半ば覚悟はしていたが、中に入っていたのは此のバッグに入れた覚

えもないものばかりだった。

マッチ、ナイフ、非常食、何故か暖かい茶の入った水筒、そして、古ぼけた紙。

手に取って見ると、そこからまるで生き物のように墨汁が溢れだし、蛇のようにうねっていった。

逆三角形のような形、その下にカーブを引かれたように小さいぼつぼつが生まれる。

……地理に疎い俺でも知っている。

この形は……。

「カムチャツカ……？」

そして、カムチャツカ半島と思われる逆三角形の南端部分に、黒い丸が表示された。どうやらこの黒い丸が、地図（らしきもの）の中心になっているらしい。

と、頭に急に何かが浮かんできた。

【自分を中心に地図が描ける程度の能力】

これは……俺の能力の一つ？

ん？ 能力ってなんだ？ 一つってなんだ？

良く分からないが……唯、この黒丸が自分の現在地だということは分かった。

試しに空を見て、能力を発動するようイメージしてみる。
携帯のGPS機能にアクセスするのを思い浮かべると、空中に先程と同じ地図が浮かび上がった。
媒体は何でも良いらしい。

紙に浮かんだ地図を見て、縮図を変えろとイメージしてみる。
案の定、俺が想像した通りの縮図に変わっていった。
次に、地名を出せと念じてみると、

半島に一番近い小さな点の横に“占守島”と浮かぶ。ついでに半島の南端には、“ロパト力岬”と浮かびあがった。

占守島しむしゅは俺でも知っている。

確か、千島列島の最北端の島の名前だったはずだ。

やはり、此処はカムチャツカ半島らしい。

が、町の名前やそう言ったものは一切出ない。念じても駄目だ。

まさか、市や街そのものが無いのか？ それこそ無いか……と考えた時だった。

「　　つく!?!?」

比喻ではなく、本当に頭の中で閃光が煌めいた。

そうだ。
思い出した。

俺は密航船の中へ踏み込んだ時、密航船の乗船者に発砲されて死んだんだ。

それで、何か神と名乗ったヤツに会って……。

お前は不思議な男だ。友達を増やすことを第一に考え、どんな人間とも友達になれる。お前が死んだ後、大勢の“友達”が悲しんだ。

お前が他の世界に行ったらどうなるか、興味が沸いた。

お前には別の世界に行ってもらおう。

なあに、ちゃんと特典も与えよう。お前にぴったりの能力と、生活に役立ちそうな能力を幾つか。そして

。

そして………何だったか。

まあ、そのうち思い出すだろう。

それにしても……だ。これからどうしろって言っただ？

そもそも、此処は地球であることは間違いないにしても………何時の時代だ？ 人類誕生前とかだったら勘弁だぞ、俺は友達をつくることを生きがいとしていた男なんだから。

兎に角、これが能力の一つってことか。

しかし、幾ら地図を作れてもなあ……。カムチャツカとか、俺は口

シア語は喋れねえんだが……。
取り敢えず、日本に行くことを目標としようか。
生憎、バッグの中には財布もパスポートも無かったが、無い物ねだりをして仕方がないだろう。

前向きに、一歩踏み出そうとして

「うおおおお！？」

踏み込んだ先が、ズッポリと抜けた。

「ウソだろ！？」

まさか、雪で隠れた……縦穴？

まずい、俺はヘルメットも何も装備していないってのに、穴に転がり落ちたりしたら……。……。

太古の昔、まだこの星の存在、いや、宇宙の存在すらあやふやであった頃。

世界に存在していたものは、神だけであった。

神は地を創り、海を創り、神のみの“楽園”を創り上げた。

其の神々だけの“楽園”については、今を持って不明なことが多い。そもそも書物にも残っておらず、細々と伝わる口伝のみがその存在を知らしめる。

しかし、誰かが言うには　その“楽園”において、大きな戦いが起こった。

原因も、そもそも誰が誰とどのように戦ったのかも記録されていない。

が、参加した（巻き込まれた、という方が適切かもしれないが）神の数は八百万^{やおよそ}。死んでも死んでもその数が尽きることは無く、殺し合いは永遠と続いた。

“楽園”は永きに渡り、神々の骸^{むくろ}と血に満たされた。

八尋^{やひつ}の海が血で染まり切り、大地が神々の骸で覆い尽くされ、空が蒼ではなく紅に変わった頃、一つの植物が芽を出した。

やがて、“楽園”からは最後の神を残して全ての神が消えた。

最後に生き残った神　便宜上、『神』と呼ぼう　が周

囲を見渡すと、とある“木”がそこにあった。

深紅に染まったその“木”は、邪悪で『神』を遥かに超える神力と、『神』が感じたこともない不気味な力　妖力を持っていた。

『神』は其れを恐れ、最後の力を使って“楽園”毎その“木”を封じ込めた。

誕生したばかりの此の星、即ち地球の地下深くに。

その“木”こそが、神々の血を吸い骸を喰らい成長した妖怪

“吸血木”、或いは“樹木子”とも呼ばれる妖怪の中でも特別な存在
“神喰木”である。

なお、此の『神』とは今の神、俗に“新神”とも呼ばれる神々たちの祖となった。この『神』は“木”を封じるのに神力の九割を費やした。そして消滅する直前、最初の子孫を残していった。

そう、此の伝説は、新神を中心に語り継がれていったものなのだ。

此れだけ聞くと、恐ろしい伝説のように思える。
ところが。

「痛てててててててて……」

頭をさすり、周囲を見渡す。

何も見え……ないなどということはなく、少し薄暗いが、それ程不便ではない程度の暗さだ。

周囲には剥き出しになった、何かによって削れた岩。

地層が剥き出しになった、赤茶けた土壁。

「畜生、阿呆か俺あ……」

文句を言いながら、俺は自分の体を触ったり、適当に身体を動かしてしてみる。痛みはまるで無い。

ひよっとして雪の中で全く寒くならないのも、体が頑丈なもの、神のお陰ってやつか？

横には、ボストンバッグが綺麗に着地したように置いてあった。汚れ一つついていない。

中身が無事かを確認すると、ふと、目の前に何かがあるのに気付いた。

目を凝らし、俺は今度こそ絶句してしまった。

「なっ……！？」

薄暗い中、ぼんやりと確認できるそれは、

「フィドル・ヘッド
船首像……？」

木彫りの、まるで本物かと思うくらい精巧で美しい、女性を模した像だった。

船首像のようなその女性は、十字架に張り付けられているように見

えた

。

初の友達にして家族、

赫柱あかはしら

神紅しんくとの出会いだつた。

これが俺……雨後うご

常陸ひたちと俺の最

第一話 やって来て雪下の洞窟（後書き）

次話も直ぐに投稿する予定です。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第二話 初めての友達（前書き）

連続投稿二回目です。

主人公の職については深い意味はありません。ただ、主人公はどちらかというと体育系なところもあります。

第二話 初めてのお友達

「こいつは……」

俺は息をのんだ。

芸術品には疎い俺だが、それでも息を飲むほど美しかった。

目の前の船首像フィドル・ヘッドのような木の像は、磔刑に処せされた美女を表しているようだ。眼福なのかそうじゃないのかはいまいちわからない。不気味なほどリアルに塗られていて、ミイラより余程人間らしい。

女性は、中世の貴婦人が着込んでいそうな深紅のロングドレスを身に纏っていた。磔刑にされている人間が着るには、あまりに不釣り合いな煌びやかさだ。

そして、なにより。

女性の顔が、だ。

諦観しているというか、全くの無表情だった。

以前、罪人が裁かれている風景を描写した絵を見たことがあるが、罪人たちは皆苦悶の表情を浮かべていた。

が、この女性は全くの無表情だ。かえって不気味だった。

が、俺はそんなことは気にならなかった。

「すげえ……」

何が凄いのか自分でもよくわかっていなかったと思うが、俺はバツ

グからマッチを出して火を点けた。
その火で周囲が照らされ、木像がさらに美しく見える。
俺は誘われるように、その像に近付いていき

「あ」

岩に躓いた。

手から落ちたマッチ棒が、薄暗い闇の中を明りのラインを引きながらくるくると回り、木像に当たった。

「お、おい」

心臓が飛び跳ね、臓器が全てホッピングしたような感覚に襲われた時は、もう遅かった。
木像に火が付き、煙が上がった瞬間 像の目が、カツと見開かれた。

「ッ！！！？」

瞬間……俺は。
全身が凍った気がした。
吐いた息が白くなったような錯覚に襲われ、身体ががたがたと震えだした。

女性の瞳は、真っ黒だった。それに、紅い螺旋がぐるぐると回りながら浮かび上がり、やがて黒と混ざり、空気に触れて黒ずんだような血の色……ダークレッドへと変わり、そしてまた漆黒になった。その代わり、さっきまで金髪ブロンドだった髪が、血を芯まで吸い取ったかのようなダークレッドに変わっていった。

顔の左半分は急に伸びた前髪に覆われ、右の瞳だけが俺を見下ろしている。

そして、

メキャツ！！！！ バキツ！！！！

「な …… !?」

女性の身体が、木…になった。

いや、“女性の中から木が芽を出して、それが腹を食い破って飛び出してきた”という表現の方が適切だろう、と場違いにも考えた。

枝、幹、葉……色々なものが飛び出し、女性を磔はりにしていた十字架を壊した。

伸びた枝や幹は細いが強靱で、地に着くと瞬時に根を張り巡らせた。しかも、そのまま動き出した。

女性の体が浮く。その身体から伸びた六、八本の枝やら幹やらが、蜘蛛の足か何かのように女性の身体を支えながら動き出したのだ。張り巡らせた根を、自ら千切っていく形で。

女性はじっと俺を見下ろしている。

其処まで来て、漸く気付いた。

この女性、俺に危害を加える気満々だ。

くそっ！！！！！！

心の中で悪態をつきながら、俺は走り出した。

走る、逃げる、何処へ、どうやって、如何して！！！！？

頭の中にくいつもの言葉が浮かぶ。

振り向くと、俺は女性の表情の変化に気付いた。
怒り半分、当惑半分といったところだ。

良く見ると、枝のうち何本かが俺に狙いを定めているが、全くこっちは襲いかかってこない。

「……………して……………如何して！？」

その時になって、俺は女性が何か喋っていることに気付いた。
如何して、だ。

女性はひたすら、如何してと喋って、いや、叫んでいたのか。

何故だか知らないが、俺は一気に逃げる気が失せた。

生をあきらめたわけではない。目の前に絶望したわけでもない。

唯、逃げたく いや、離れたくなかった。

「な、なあ……」

俺は女性を見上げる。気付いたように、女性は俺を見下ろした。その表情は憎悪に歪んでいるが、俺には涙をこらえているようにも見えた。

家族を失ったばかりの、俺のような表情だな。ふと、思う。

俺は友達を求めている。

傷つけられた分、それで幸せになろうとした。色んな人と、楽しく過ごしたかった。

例外など、あるわけもない。

「お友達になりませんか？」

その言葉を吐きだすと同時に、頭の中にナニカが浮かび上がった。

【無敵になる程度の能力】

私が生まれた時、其処は戦場だった。

“吸血木”^{きゅうけつぎ}。“樹木子”^{じゅぼし}とも呼ばれるが、その木は戦場跡（或いは戦場）に生える妖木だ。

私が生まれた時から、栄養には困らなかった。

私は本脳のままに喰らった。

神々の肉、血、骨、そして怨念・怨恨・憎悪・後悔。

喰らって成長していくうちに、私は神々の戦いがどれだけ莫迦らしいかがよくわかった。

殺し合いを永遠と続け、死んだら世を呪ってやると言わんばかりにドロドロの怨念を残して逝く。

理念とか、愛情とか、忠誠心とか、そんな綺麗事を声高に叫びながら死んでいき、最後には私の餌となる。

本当に、下らない。

唯それを見つめ続け、私は喰らっていった。

別に、力を得て如何こうしようとしていたわけじゃあない。

餌があれば喰らう。当然のことをしていたまでだ。

敢えて言えば、普通の樹木子なら神の骸一つを喰らっただけで耐えきれずに壊れてしまう（と思われる）が、私ならそれを無制限に食べても胸やけ一つ起こさなかっただけの話だ。

勿論この時は、私が喰ってきた“神力”が憎悪の力で何倍にも跳ね上がり、其処らの神など比較にならないものとなるなど思っていなかったし、たまりにたまった怨念が“妖力”と呼ばれる全く別の力

となり、私は其れを初めて手に入れ　初めて“妖怪”と呼ばれる存在となったことなど知らなかった。

そして永遠とも思える時間が経った後、遂に生き残りは二人となった。

そして、片方が死んで、私は其れを腹に収めた。

相も変わらず、無味無臭。面白味も何ともない味だが、此処まで生き抜いた猛者の血肉だけのことはあり、神力や妖力は結構変わった。さて、最後に生き残った神はエサどうしようか。最後に生き残った、つまり神で一番強かったモノだが、今の私なら瞬殺できる。だいぶ弱っていた、というのもあるが。

が、別に殺すという手間をかけてまで喰いたくもない。どうせこいつは長くない。くたばってから骸を喰おう。

そう思っていたのが、油断だったと理解する頃には、私は封印されていた。

それから先は、ずっと呪っていた。

私を此処まで成長させたのは、戦に明け暮れていた神々おまえらじゃあないか。

私だって、好きで骸を喰らって成長する妖怪に生まれたわけじゃない。私が生まれたところが戦場ではなく、綺麗な湖の畔だったなら、私はもっと綺麗な姿で生涯を終えられただろう。こんな、血を吸ったような紅黒い色ではなく。

下らない。

醜い。

一番下らないのは、私自身だ。

足元に火が付き、気付いたら身体が動くようになっていた。

万、億　　それくらいは封じられていたからだろう。地上に流れ出たすべての血を喰らうことで、私は喰い繋いできた。別に喰わねば死ぬわけでもないが、それしかすることが無かったのだ。

地上にいたのは大きなトカゲのようなイキモノだったり、猿のようなイキモノだったり色々いた。そいつらを喰っても力は今までのように強化されていかなかったが、力などどうでも良い。味も変わらない。

下らない。

動き出して、目の前にナニカがいた。

出で立ちは神に似ているが、神力は無く、妖力しかない。……そうか、思い出した。地上には、妖怪が居たんだ。私以外にも。

暫し考える。私は骸を散々喰らったが、生きているモノを殺して喰らったことはない。

だが、久方ぶりに目覚めたからか、心地の良い食欲が私を満たしていた。

喰うか。

そう思い、枝を伸ばす。が、

……！？

伸びない。いや、正確にはアレに届かない。見えない壁があるとか、そういうものではない。伸ばせられない。身体が言うことを聞かず、頭も否定し始める。

攻撃しては、いけない。

「ぎゅっ、して……」

思わず、口から言葉が出る。

嗚呼、声を出すなど、此の世に生を受けてから初めてかも
しれない。私の記憶が正しければ。

「如何して如何して如何してッ!？」

混乱していると、アレが私を見上げた。

その黒い瞳に、私は吸い込まれそうになった。
とても、惹かれる。

「お友達になりませんか？」

オトモダチ？

お友達？ こんな私を？ 下らない存在である私を？ お友達に？

「オト……モダチ……」

「そう、俺と……楽しく、一緒にに騒いだり、励まし合ったりとか、笑いあったりとか……とにかくッ！
色々ありますけど……お友達になつてくれませんか！！」

……嗚呼。

下らない存在が。

一人だけ、いた。

そう思った直後。

私は、あの人に飛び込んでいった。

これが私……赫柱あかばしら 神紅しんくと、私が

身こも心を捧げる唯一無二の絶対的な存在にして、私が愛する方、雨あめ
後ご 常陸様ひたちとの出会いだった。

「宜しく願いします、御主人様」

「じゅわいー!? 如何してじゅなったあ!?」

第二話 初めての友達（後書き）

前回到引き続き、プロローグ的な話です。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第三話 影の中の神紅（前書き）

物語の開始地点がカムチャツカなのは、北から攻めようかと思った
だけです。

深い意味はありません。

第三話 影の中の神紅

女性と色々話しあった結果、いつの間にか数日は経っていた。女性が指摘するには、どうやら俺は“妖怪”というものになっていたらしい。

成程、道理で寒さには強いし、縦穴（此の洞窟のことだ）に落ちても平気なわけだ。

女性のことも教えてもらったし、俺も自分が一度死んで生き返って此の世界にやって来たとか色々話した。

友達に隠し事をするのは、俺の道理に反することだからだ。プライベートには深く突っ込まない、が。

もつとも、女性はニコニコしながら全て話してくれた。聞かれたことを、聞かれた以上に。

……………何故か「御主人様」と呼ばれることだけは、幾ら頼んでも撤回してくれなかったが。

それにしても吸血木……………ね。

“楽園”とか神の話とかもあったし、如何考えても俺の知っている地球じゃあない。

いや、昔は妖怪や神とかがゴロゴロいたのかも知れないが。

それで女性の名前を聞いたところ、無いそう^だ。

だから、取り敢えずイメージと洒落で「赫柱^{あかはしら} 神紅^{しんく}でいいか？」
って聞いたらメチャクチャ喜ばれた。

それにしても、だ。

神紅は、よくよく見てみると、ちょっと痩せすぎているけど本当に

美女だ。顔色がトンデモなく悪いが。

おまけに……スタイルも凄く良い。そして背が高い。俺は一七〇くらいなんだが、神紅はどう見積もっても二〇〇近くある。

だが、それ以上に怖さが目立つ感じだ。負のオーラというか、妖艶さも美しさも、全てかき消しておつりがくるような憎悪のオーラみたいなものがある。

俺は一向に気にしないがな。

「さて、どうしようかな……」

「如何する、と言われますと?」

「此の後、日本に行きたいんだよ」

「ニホン?」

首をかしげる神紅。何ていうか、こつも感情表現が豊かな性格だったのか。

………ていうか、ひょっとして………日本を知らないのか?

「神紅、今は西暦何年だ?」

「セーレキ?」

………またオウム返しをされてもなあ………いやいや、それよりも、だ。
西暦も駄目か………紀元前?

……阿呆か俺は。紀元前に紀元前生まれの人に「今は紀元前何年ですか？」と聞いて答えが返ってくるわけないだろ。

「えーと、ヒノモト？ 扶桑？ 八島？ 大和？ 倭？……つてちよつと待て」

「はい、何でしょう？」

「お前、何億年も封印されていたんだろ？ その間、地上で起こったこと、わかるのか？」

「喰った血肉を介せば、大体のことは読みとれます。まあ、ここ最近は主に動物の死骸を食べていましたから、得られた情報は少ないですけど」

「そうか。まあ、兎に角、南下したいんだ」

そう言つて、地図を出す。

地図は紙に書かれている方がしっくりくるから、普段は此の古い紙を使う様になっている。

「この黒い丸が現在地。んで、日本はこの列島を南に行った方だ」

「海がありますね」

「ああ。如何したものか」

「え？ 飛んでいけばよいのでは？」

「飛ぶ？」

驚いて神紅を見ると、逆に不思議そうな表情で此方を見つめて来た。

「妖怪は妖力があれば、程度の差こそありますが大抵は飛べますよ？」

「そ、そうなのか」

「海を越えるとなると、些か長丁場ですね」

地図を指でなぞりながら、神紅は俺に体を摺り寄せた。

「……如何した？」

「いえ。御主人様の温かさに触れていただけです」

何か凄く温かいし、柔らかいのだが。……まずい、クラクラしてきた。

「私が連れて行って差し上げましょう、御主人様。御主人様の行くところはどこでもお供します。ニホンだろうが何処だろうが、何処

へだつて導いて差し上げましょう。

……あ、申し訳ありません、生意気なことを言いました。私は御主人様だけの“下僕”ですのに……。『導いて差し上げる』など、余りにも身分不相応。導かせて下さい、この御主人様のため以外に動く気など全く無い、不出来な我儘生意気奴隷に、一滴程度ひとしずくで良いですから御慈悲をください。

そうしていただければ、私は何だつてして見せます。あ、勿論、御主人様のためなら、無償で御奉仕いたしますよ？ エへへ。

ですけど、ほんの少し我儘を言わせて下さい。御主人様、御褒美をください……ほんの少し、少しでいいですから、触れさせてください……」

耳元で呟きながら、神紅はますます身体を寄せてくる。

「あ、ああ……」

此れって……まさか、なあ。

でも……結構好意を持ってくれているみたいだ。そこは、とても嬉しい。

「でも、妖怪もいるだろうし、危険じゃないか？ まあ、俺には能力もあるわけだが」

そう聞くと、神紅は喜色満面とした笑顔を急に無表情に切り替えた。思ったたら、またにっこりと微笑んだ。

……顔色はものすごく悪いが、不思議と俺は怖くは感じなかった。

「確かに数億年なら兎も角、今は妖怪が蔓延っています。

ですが、御安心してください。御主人様に危害を加えようとする下らない有象無象は、全て私が消します。私の【あらゆるものをくさらせる程度の能力】で。

……まあ、今まで戦ったことなど全くと言って良いほどありませんけど。あ、御心配には及びませんよ？ 戦ったことが無いだけで、戦えないわけではありませんから。どうせ、御主人様を傷付けるよくならない輩なんてどうしようもなく屑な連中ばかりでしょうし、神程度でも大した脅威ではありませんし。寧ろ、私の能力は神にこそ効きやすいんですけどね。神々の怨念が基もとになっている能力ですから。でも、あり得るんですかね、御主人様を狙う下らない存在が此の世にいるなんて。信じられません。もしいたら、さぞかし下らない存在なのでしょうね。嗚呼、想像しただけで殺意が沸いてきました。凄く殺したいです、そんなの。良いですよ？ 御主人様に逆らうのですから。殺すのは当然ですよ？

あ、そうそう。私は御主人様以外を傷付けることなんて全く気にしませんから、露程も気にしませんから、御気を揉まれる必要はありませんよ？ 証拠に、今から片眉一つ動かさずに此の針葉樹林にいるモノ全部殺して見せましょうか？ え？ 大切な命だから駄目？ そんな……流石は御主人様です。わかりました、私、駄目な子でした。御免なさい御免なさい御免なさい御免なさい御免なさい。駄目で愚鈍で愚図でどうしようもない下僕で御免なさい。次からは、次からは注意します。あんな下らないモノでも、御主人様が大切だというのがなら傷付けません。

ところで御主人様の御力ですが、御言葉ですが、御主人様の【無敵になる程度の能力】は、“敵が攻撃できなくなる・敵の戦意や殺意が向けられなくなる”という、強力ですが受身の能力です。それを

「二重の意味？」

「“腐^{くさ}る”と“鏽^{くさ}る”。二つの意味があるんですよ

くさ・る【腐る】

? 細菌の作用で植物性・動物性のものが分解して変質する。食物などがいたむ。腐敗する。

? 身体の組織が破れ崩れる。うみただれる。

? 木・繊維・金属などが風化したり酸化したりしてぼろぼろになる。腐敗・腐食する。

? 物の変質して、嫌なにおいがついたり汚れたりして使えなくなる。? 純な心が失われてだめになる。精神が救いようが無く墮落する。

? 思い通りに事が運ばないため、やる気をなくしてしまう。いや気がさす。めいる。

他にも賭けに負ける・びしょぬれになるなどの意味がある。

くさ・る【鏽る】

? つながる。続く。

? つながり合わせる。つなぐ。

「つまり、唯腐敗させるだけの能力じゃないってことか」

「はい。もつとも此れは、私の中に怨念や怨恨が溜まっていった変質した結果です。」

本来の私の能力は、【骸の血肉を喰らい力を得る程度の能力】です。“上物”を喰えば喰うほど力が増えます。今のところは無制限ですがね。限界を感じたこともありません。

そうそう、“骸”限定ですので、生きているモノを喰らうこととはできません」

話によると、神紅は八百万やふゆの神々の骸をほぼ喰い尽くしたそうだ。つまり……トンデモなく力をつけているということじゃないか!?

「おいおいおいおいおいおい、反則級じゃねえか。使える能力はそれで仕舞いか?」

「もつとありますが……」

神紅は俺をチラリと見て、うつすらと微笑んだ。

「一番馴染んでいるというか、使いやすいのは此の二つですかね。他のは奥の手というか、搦め手というか……使う必要はないと思いますよ、二つだけで十分強力ですから。」

何なら、此の大陸每腐らせても良いですよ?」

「そんなことができるのか!??」

心底驚いた。

此処ってユーラシア大陸だぞ？ “腐らす”……大陸を腐らせばどうなるかなど、想像したくもない。

「私は妖力と神力の量が凄まじいですからね。多分、此の大陸に群がる妖怪と神全てを足しても、私の総量の一割にも満たないと思いますよ？」

永劫の時をかけ、神々^{ヤツラ}の骸を喰い続けたのは結構大きな力になりました」

“大きな力”どころの騒ぎじゃないだろうが……！！

何て言いかけたが、神紅は冗談抜きでどうでもよいことらしい。俺を見てずっとニコニコしている。

……欲望が漏れてる気がする。

「凄いなあ、神紅は」

「！ エへへ……御主人様……」

そう言っただけで彼女の頭をポンポンと叩くと、神紅はもっと機嫌が良くなったみたいだ。

わかりやすいというか、なんというか。

「あ、そうだ！」

神紅はポン、と手を叩くと、俺の顔を見下ろした。
深紅の方が長身だから、如何してもこうなってしまうようだな。

「御主人様、先程の地図、御見せくだつても良いですか？」

「あ、ああ」

何か知らないが、地図を表示させる。

「では、行きたい場所……ニホンとやらを、表示させてもらいますか？」

「ああ」

地図を両手で持ちながら、日本列島を表示するよう念じる。
縮図が変わり、見覚えがありすぎる弓形ゆみなりの列島が表示された。

「ニホンとやらの、何処へ行きたいですか？」

「何処つて……」

取り敢えず、カムチャツカから千島へと向かった先……北海道北東部の知床しれとこ辺りを指差す。

「そうですね。ではッ」

「へっ、おまつ、何を」

其処まで言うと、急に体が引つ張られた。まるで、見えない巨人の手によってアンダーローされたような気分になり、俺は危うく吐きそうになった。

ミキサーにかけられた食材って、こんな気分なのかもしれんと阿呆なことを考えているうちに、身体が止まった。

気が付くと、目の前に神紅の顔の髭アップがあった。

どうやら、神紅に御姫様だっこをされている状態らしい……俺、恥ずかしッ！！！

「あ、有難うって……！？」

降りしてもらい、周囲の状況を確認して啞然とした。

先程までの洞窟内とは似ても似つかない、高山植物が生えた大地が広がっていた。
山まで見える。

「おいおい、「冗談だろ……？」」

くそ、今日の俺の流行語大賞は「おい」だな。……ちつとも嬉しくねえ。

「まさか……」

「はい、成功のようですね」

事も無げに、ニコニコ微笑みながら言う神紅。

「洞窟と此処を繋らせたのか？」

俺の質問に、神紅は首肯で返した。

“つなげる”という意味の繋る。つまり、ワイプ用の回路を開いた……ということか。

ってことは……此処は知床かよ。

「ってことはこんなことも……」

神紅はそう呟くと、ズル……と不気味な音を立て、俺の影の中に下半身を沈めた。

今度は自分と俺の影をつなげたのか。

「わぁ……御主人様の影と一つ……幸せです!!」

メチャクチャな能力だ……そう考えて頭を抱える俺を尻目に、神紅は嬉しそうに笑っていた。

第三話 影の中の神紅（後書き）

神紅が飛ばしまくっていますが、彼女はまだまだ本領発揮していませんよ。彼女は初めて自分を受け入れた主人公を完璧に心酔しちやっています。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第四話 影踏み骨砕き（前書き）

原作キャラを何時出すか悩み中。出すキャラは決まっているんですけどね。時系列的に。

今はこんなペースですが、来月からは更新する余裕が一気に減りますので、さっさと進めたいのですが……。

第四話 影踏み骨砕き

北海道についてから、俺と神紅の二人はのんびり旅をしていた。なんとなく南を目指し、日本を横断する形で進んでいく。

人間の村というか里も数カ所見つけた。教科書で見たような竪穴式住居だった。多分、今は縄文時代から弥生時代あたりなのだろう。

神紅は基本的に俺の影の中に入っている。その方が落ち着くらしい。木なのに暗いところが好きなのか……関係無いか、妖怪だしな。

まあ、ずっと一人は寂しいから、しょっちゅう呼び出しているせいで殆ど一緒にいるんだが。

……だが、神紅はいつも俺に密着してくるといっつか、抱きついてくるから、こっちは色々キツイ。

神紅は本当に俺を好いてくれているみたいだ。

道中、今はまだ妖怪の数が少ないのか、獣くらいにしか出くわさなかった。

もっとも後になって、妖怪がいらないわけじゃなく、神紅という大妖怪が蟻に見えるような膨大な妖力を持つ存在を恐れ、皆退避していったというだけの話だと知ったのだが。

「妖怪の本能ってのは、食人衝動、つまり人を喰らうことです」

影から身体を出し、俺の身体に纏わりつくかのように密着しながら宙を浮いている神紅は、そう言って何かを咀嚼するジェスチャーをした。

「私の場合、それは骸を喰らい血を吸いたいという衝動です。勿論例外もあります。其れなりに生きた妖怪は、別に何かを喰わなくとも妖力が枯渇しなければ生きていけますし、蟲だけを喰うとか、文字だけを喰うとか、時間を喰うとか、妙に“偏食”な輩もいます。が……しかし、食人衝動が無くとも、殺人衝動がある妖怪もいます。さらに、付け加えるなら」

其処まで言つて、神紅は俺の顔を抱くように体を近付け、耳元で喋り始めた。

……ていうか、胸が。
胸が当たっているんだが。

多分、俺の顔は真つ赤になっているんだろう。神紅はエへへとはにかみながら、俺の頭を撫でてきた。

「妖怪にとって、人間など全くの異種族。恐らく大多数の妖怪は、人間の命になど重きを置いていないでしょう。また、妖怪というのは他種族に対して排他的なものが多いです。そういう輩は縄張り意識も強く、旅人であろうとも土足で入ることを許さないでしょう。ええと、つまり、ですね……」

「妖怪と友達になるのは口で言うほど容易くない。が、だからと言って妖怪と友達になる酔狂な人間もそうそういない……というわけだな」

口を濁して言われ、俺は盛大にため息をついた。

が、それは向こうからすれば当然のこと。

“根なし草の旅人”と言えば聞こえはいいが、相手からすれば唯の余所者だ。そんなよそ者といきなり仲良くなれるのは、よっぽどのお人好しか豪胆なやつだけだろう。

「御主人様が如何なる妖怪かはわかりませんが、私が“吸血木”に分類されるように妖怪にも種族があります。勿論、種族が同じだからといって仲がいいとか共に暮らしているとかは限りませんが……その、御主人様は、妖力が少ないと言いますか……些か人間らしいところもあります。つまりですね……」

其処まで言っつて、神紅は態度を豹変させた。

憎悪と憤激を煮詰めてできたような黒い瞳をキュッと細め、口は今にも齒軋りしそうなほどに歪んでいる。

常時噴出されている憎悪のオーラはさらに高まり、足もとの草や周囲の木々が一気に腐っていった。

「有象無象の下らない存在から見れば、御主人様は“非力でちょうど小腹も満たせそうな格好の餌”に見えるかもしれないということです」

そう吐き捨てた後、神紅は嘲笑するかのようにはん、と息を吐いた。

そう、俺は自分が妖怪であることも知らなかったし、どんな種族な

のかも知らない。妖怪には、稀に一人だけの種族というのものもあるらしいが、もしかしたら俺は其れかもしれないな。
神紅曰く、自分が妖怪でどんな種族なのかは「なんとなくわかる」らしいが、俺には綺麗サツパリ何も浮かばん。

そんなことを考えながら、地図を頼りに俺たちはのんびり歩いて行った。が、もう数週間は経ったと思うんだが、未だに妖怪にも何も出くわさない。
時たま、兎や鹿と遭遇するくらいだが、とある村を見つけた時だった。

「あつ！ 神紅、見ろ！」

「あれは……妖怪ですね、獣に近い……下級ですね」

神紅が前に言っていたが、妖怪というのはヒト型に近い、或いはヒト型になれるものほど妖力や知力が高いそうだ。

村の入口あたりを、黒いドロドロした狼と熊をごつちやにしたようなやつらが屯たむろしていた。どう見積もっても一〇匹はいる。

村の人間たちは石斧や槍のようなもので応戦するつもりらしい。が、如何考えても不利だろう。

一触即発状態。

「まずいつ!!」

「あー、ヤツラの狩猟相手となつてしまいましたか。名も無い猿より低能といつても、妖は妖。終わりましたね」

「ッ神紅！」

深紅の妙に冷静な言い方が癪に障った。

これは、自然の摂理。動物の大群が人里に入ってくるようなものだ。ライオンが街に入って暴れるくらいのこと。俺がいた日本でも、猪が暴れるくらいは珍しくない。よくあることで、仕方がないこと。わかつてはいるが………畜生ッ!!

目の前で起こりそうだったのに、納得できるか!!

「俺は能力を切つてヤツラの気を引く罠になる！ その間に村を護つてやつてくれ!!」

「え!?! ちょ、ちよつと御主人様あつ!?!」

最近知ったことだが、俺の【無敵になる程度の能力】はON/OFFが切り替えられる。知ったというか、急に頭に浮かんできた。

俺は携帯の電源を切るようなイメージを浮かべつつ、全力で走りだした。

50メートル走八秒台嘗めんなよ!

途中、木の棒を拾つて一際デカイ、リーダーみたいなポジション

て如何して如何して如何して如何して

寂しい。辛い。痛い。寒い。怖い。

私の身体が腐っていく。御主人様がいないと、私は腐ってしまうのだ。

ドロドロになつて、汚らしい汚物の塊となつて、それでも御主人様しか求められない私が、さらに腐っていく。

逢いたい。今すぐ逢いたい。触れていたい。触れてほしい。ドロドロに沈殿していく思いが、爆発しそうになる。

此の思いの前には、御主人様以外の存在など、塵以下にすぎない。

何故、こんな思いを

瞳が、捉える。

人間達。

御主人様はヤツラを助けるために、あんな危険な真似を

人間風情が。有象無象如きが。下らない存在が。

御主人様と私を、引き裂くつもりなのか……………。

駄目だ。

御主人様は言っていた。あついうのでも、大切な命だと。傷付けてはいけない、と。

それに、御主人様は私に命じた。

その間に村を護つてやってくれ！！

私の本来の姿は、“楽園”すべてを包み込むほどの大樹。能力とは別に“吸血木”の固有技能として、この枝や根などを自在に身体から生やし、操ることができる。

触手のようなもので、伸ばして骸に突き刺せば、それだけで血を吸い、肉を喰らうことができる。

私は跳躍し、村と妖怪の間に割り込んだ。

根を伸ばし、村の入口の前に柵を作る。私の根や枝は、神でも傷一つ付けられない。

御主人様のもとへ向かった下らない妖怪共は三匹。目の前には、群れの長らしきデカブツを含め八匹。

全員が、私を見ている。

こついうのを、視姦しかんされる、というのだろうか。

酷く不快だ。吐き気がする。

私を見つめ、撫でまわし、堪能しつくすまでむしゃぶりついて良いのは御主人様だけだというのに。

「私を見るなッ……下らない有象無象共があ！！！！」

腕を振るう。それだけで、デカブツ以外の雑魚ザコが消滅した。デカブツも倒れ、身体はグチャグチャだった。もう足の一本も動かせないだろう。消えるのも、時間の問題だ。

……嗚呼、本当に、下らない。

私が片手を振ったくらいで消えるような有象無象が。

御主人様を……煩わせた。

御主人様？

私は御主人様の方を向く。

有象無象が三匹、御主人様に飛びかかっていた。
……飛びかかった？

御主人様は……まだ、能力を切っておられるの？
まさか……気付いてない！？

瞬間、私は自分の影の中に飛び込んだ。

しまった……！

逃げるのに夢中で、予想以上に近付かれていたことに気付かなかつた！！

振り向いたときには、すでに狼熊が俺の背中に向け飛びかかっていた。このままでは、噛み付かれ、倒され……喰クわれる……。

そう思った直後。

ズルリ、と。

影から神紅が飛び出した。

神紅は三匹に蹴りを叩き込み、吹き飛ばしていた。いや、蹴りというよりは大砲だ。狼熊は腹にどでかい穴があいていて、奇妙な色の体液を撒き散らしていた。

「御主人様」

「あ、有難う」

振り向いてにつこり微笑む神紅に笑みを返すと、ますます喜色満面になってスタスタと狼熊の下に歩いて行った。

「御主人様……見ていて、くださいね？」

そう言つて神紅は、狼熊の頭を踏み潰した。

轟音。地鳴り。

踏み下ろした足を中心に、巨大なクレーターが出来上がった。

それでも、神紅は足を振り降ろし続けている。

踏み潰し、踏み躪り、狼熊の身体を地面に染み込ませるかのように、グチャグチャのドロドロにしていた。

「神紅、何を」

「御覧下さい、御主人様。御主人様たかに集つた有象無象の、此の無様な姿を。無様。本ツ当に、無様。此の程度なんですよ？ 神も、妖怪も、人間も。下らなくない存在は、御主人様だけです」

一匹目の狼熊が完全に地面と同化した後、神紅はふわり、と浮かんで二匹目の真上に移動。ピクピクと痙攣している二匹目を、そのまま踏み潰した。再びクレーターが出来上がる。

ダークレットの髪を優雅に揺らしながら、漆黒の瞳に俺を映しながら

ら、神紅は足で踏み躪る作業を開始した。
儂げに、清楚に微笑するその顔は、とても綺麗だった。

俺は、そんな彼女を見て呆然とすることしかできなかった。
ふと、村の方を見る。

数人が武器を構えたまま、こっちまでそろそろと歩いて来ていた。

「さっきの蹴り、もう死ぬほど手加減したんですよ？　なのに、それだけでもう瀕死です。能力を使うまでもない。所詮は此の程度なんですよ、御主人様以外の存在なんて。」

それより御主人様、私、頑張りましたよ？　助けてもらっておきながら、先程から御主人様を警戒している有象無象どもを殺すのを頑張って抑えていますし、御主人様の命令をちゃんと聞きましたよ？　偉いですか？　エへへ。

それより御主人様、もう、あんな危険な真似、しないでくださいね？　あんなの、御主人様が困なんてやらずとも、私が直ぐに消せるんですから」

その言葉が終ると同時に、二匹目が完全に潰れた。其れを詰まらなそうに一瞥した神紅は、今度は三匹目の狼熊を踏み潰す作業に入っていた。

……………怒っている、のか？

神紅は笑顔だが……………激情に駆られているのが、漸く見て取れた。

村の人間たちが近付いてくる。

……………あれは……………敵意を持っているのか。俺は今、能力を発動している。

つまり、敵意の矛先は俺ではなく……神紅。

「……下らないですね、殺してしまいましょうか」

そう言って、村の方を向く神紅。

……マズい!!

「神紅、俺の影に入れ！」

「え、あ、はい」

俺が叫ぶと、神紅はあっさりと従った。

影に入ったのを確認し、俺は走り出した。

村から一刻も早く、離れるため。村の安全を、確保するため。

第四話 影踏み骨砕き（後書き）

活動報告でも明記していますが、私には東方の知識がほとんどありません。よって、おかしいだろうというシーンや描写もあると思いますが、そういう点はどんどん御指摘してください。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第五話 近寄る不穩近付く最狂（前書き）

神との相性最悪な神紅。常陸は神キャラと友達になれるのか……か
なり困難でしょうね。

第五話 近寄る不穩近付く最狂

最近、知ったことがある。いや、今までの言動から、薄々察していただんだが……。

神紅は、超弩級のマゾヒストだった。しかも、ガチで俺に惚れてるらしい。

きっかけは、些細なこととか何というか……神紅本人が言った。「愛する御主人様に褒められるのも大好きですけど、叱られて傷めつけられるのも絶対良いと思うんです」と。

最近是她女からのアプローチが一気に激しくなって来て、何度喰われかけたか数えるのも面倒になって来た。

で、それが冗談でも狂言でもないと知ったのが、ついこの間のことだ。

知床から南下を続け、俺たちの時代では札幌市さっぽろがあったところ辺りに小さな山があった。

其処には鬼のようなヒト型の妖がコミュニティーを形成していて、俺は手作りの酒と干物を引っ提げて挨拶に行った。

すると、案外友好に接してもらえたので、また来るつもりでその日は山を降りた。

が、次の日山に来てみると、其処にあった山が丸々消えていた。

「!? 一体、なんだってんだ!？」

地図を見ても、間違いなく此処のはずだ。

狼狽した俺は影から神紅を呼び、何か知らないかと尋ねたんだが…

…。

「あの山ですか？ 腐らせて消しましたよ、山にいた有象無象ごと」
瞬間、頭がカツと熱くなり、気がついたときは深紅に馬乗りになって顔を殴り続けていた。

「あの有象無象が悪いんですよ、御主人様。あいつらは昨日、明日もう今日なんですが、またやってきた御主人様を殺して、御主人様の持っている酒とかを全て奪うつもりでした」

殴られて腫れた顔を気にも留めず、神紅は俺の目をジツと見ていた。確かに、俺は昨日あの山に行ったときは能力を切っていた。

「な、なんでそんなことが

」

「私は、八百万の神々の怨念・憎悪を喰らい尽くし、地上こゝの怨恨までも喰らいました。おかげで、“悪意”といった負の感情に敏感になっってしまったのです。御主人様に悪意を抱けば、どれ程取り繕っても直ぐにわかりますから」

馬乗りにされたまま抵抗らしい抵抗もせず、神紅は光悦とした表情で俺の握られたままの拳に触れた。そして、其れを引き寄せ、腫れあがった頬に拳をすりすり寄せながら、はふう、と息を吐いた。

が、俺の嫌な予感はずれてくれた。

「それは違います。御聞き苦しい言い訳に終始してしまいましたが、私は、此れが御主人様のためだと信じて殺^やりました。御主人様はとも御優しい方だから、一度でも心を許したものが目の前で腐り消えるのに耐えられないと判断しました。

それに事前に申請すれば、御主人様は反対するだろうとも予想していました。最悪の場合、御主人様は私を置いて、単身であの下らない有象無象の巣窟に乗り込む可能性もある、と。

私は、御主人様をそのような汚らわしい場所に行かせたくありませんでした。いや、以前に一度行ったという事実だけでもおぞましい消さねばなりません。御主人様は、あんな有象無象共に汚されてはならないんです！ どうせ皆汚れているんですよ、御主人様の“お友達”に、あんなモノは相応しくない……勝手ながら、そう愚考する他なかったんです！」

真剣そのものの表情で、瞳に涙さえ浮かべながら、神紅はそう言った。

「……すまん」

俺は立ち上がり、深紅の手を引く。

「謝る必要などありません。御主人様のすることはすべて正しいんですから。」

……御主人様に殴られ、快感を感じなかったと言えば嘘になりますし」

手を離した。

上半身を起こす最中だった神紅は、

「あうっ」

べしゃ、と、背中から再び地面に倒れ込んだ。

「ご、御主人様……エへへ、成程……優しくしておいて冷たく突き放す……それが、御仕置きなんですね……？」

「いや、純粹に引いただけ」

「はあうっ！？……さ、流星は御主人様です、私の心を的確に抉ってきます、容赦無い御仕置きに、神紅は身悶えしそ」

「頬が紅くなってるぞ」

「え、だって正直、此れはもう御褒美だ」

「くたばれこの変態色ボケ女あ……！！」

「むぎゅおっ……！！」

………何て事があって以来、俺の身体をフルに使ってのツツコミは、我が家族の間では普通となった。まあ家族と言っても、俺と深紅しかないんだがな。

………んで、こんなことが幾度か続いた。

俺を恐怖の目で見ていたとか、俺の悪口を言ったとか、そんなことが原因で、多数の妖怪が神紅に殺されるようになった。山が消えたり湖が枯れたりすることも多々あった。

最初はいちいち神紅に問いただしていたり、止めたりすることもあったが、能力を切っていないと攻撃を受けることが大半だったから、神紅の主張も間違っていない。おまけに、神紅は俺のためと信じて疑っていない。

それに、神紅は俺の最初の友達だし、何より“家族”だ。最近になって、二人で決めたこと。俺と神紅が家族になる、ということだ。まあ、「家族になろう」「はい、御主人様」で終わったことなんだけど。

意味があるっちゃあるし、無いと言えば無い。唯、なんとなく必要だと思った。それだけだ。

それにしても、俺の倫理観も随分おかしくなったものだ。妖怪とはいえヒト型も多いから、殺せと言われれば躊躇うだろう。だが、神紅が殺したのを見てしまっても、最近は「ああ、まただ」で済むよ

うになつてしまった。

くそ、元警察官つてのに。桜に枕を向けて寝れねえぞ。

………もつとも、後に俺はまだ普通だったことを思い知らされる羽目になる。

あの光景を見て、恐怖を感じる事ができたのだからな。

御主人様が教えてくれた。

このホツカイドーという島の先には、ホンシユーという縦長の島があるそうだ。此方の世界にやってくる前の御主人様は、此のホンシユーに住んでいたとか。

では、此のホンシユーは消すわけにはいかない。覚えておかなくては。は。

………出来る限り、という条件が付くが。

ホンシユーの方から、嫌な気配を感じる。胸糞が悪くなるような、殺意が沸くような気配。

私が喰ってきたヤツラとは少し違うし力も弱い。が、間違いない。

神。神がまた、地上に降りていた、ということが。

………糞忌々しい。

私の中に溜まっている恨み辛みは、“神が神を恨む”ことで生まれたものだ。だからこそ、私は神にとっては“天敵”となる。と

いうより、目の前に神でもいれば、力の制御が難しくなる。要は、下手すれば暴走するかもしれない、ということだ。何より。

私も、神が大嫌いだ。封印された怒りを、私は決して忘れない。そのおかげで御主人様と出逢えたことを差し引いても、だ。

でも、今の私は御主人様に仕える身。あの人が望まぬことはできない。

御主人様が命じるのなら、私は何でもする。死ねと言われれば死ぬし、御主人様以外の雄オスに犯されると言われれば、御主人様に抱かれる光景を思い浮かべながら、他の雄との吐き気を催おこす行為を耐え忍ぶだろう。

御主人様が神との戦争……いや、私にかかれば唯の殺戮となるだろうが……を私に命じるとも思えない。その神が御主人様を不快にさせる、下らない存在で無い限り。

まあ、いい。

もしものことがあれば、今度は私自身の手で。

未来永劫続くであろう地獄を、地上に顕現させてやろう。

神など、御主人様の前では塵以下の存在だということを、存分に思い知らせてやる。

第五話 近寄る不穩近付く最狂（後書き）

時系列的には、転生してからもう一〇年くらいは経っています。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第六話 恨み辛みも好きのうち（餌的な意味で）（前書き）

今回、オリキャラが出てきます。彼女は二人目の友達となりますが、いつも常陸の傍にいますというわけではありません。

次話かその次辺りから原作キャラ登場予定です。

第六話 恨み辛みも好きのうち（餌的な意味で）

神紅の能力で津軽海峡を越え、本州へ。その後も本州を南下していく。

俺が不審が籠ったな目で見られるたびにキレかけている神紅だが、最近は何とか抑えられるようになった。……対価として、ディーブなキスを浴びせられたりするが。

そんな中、いつものように歩いていると、影から神紅がズルリと出てきた。

普段は「御主人様以外に触れていたくないし、見たくもありません。視姦されるのも、想像するだけで吐き気がします」といって（俺の）影の中に引きこもっている神紅は、それでもたまに「影の中だけでなく、肌と肌で御主人様と鏈くさって（繋がって）いたいです」と言っ

て外に出てきては、俺に抱きついたりしてくる可愛いヤツなのだ。だから、今度のもそれかと思っていた。

だが、神紅は外に出ると同時に真剣な表情で、周囲を見渡しては唸っている。

普段の彼女なら、出てきた直後に俺に抱きついてくるはずなのだが。

「……どうした、神紅？ 敵か？」

「……御主人様」

神紅はそう言って、俺の前に立ち右腕を横に伸ばした。どう見ても、

後ろにいる俺を護っている、若しくは俺が先に進むのを拒否している体勢だった。

「……ちよつと、我慢していてくださいね？」

神紅がそう言った直後、俺の周りの空気だけが薄いダークレッドに染まった。それが神紅の妖力で生まれた結界だと理解した直後、ドン、と空気が振動した。

「ッ！」

俺は咄嗟に両腕を突き出し、顔を庇うポーズをとった。同時に右足を前に出し、腰を落とす。

……つと、能力を発動しなくては。

「……猪口才ちよくさいな。五月蠅ごげつい有象無象はこれだから困る。御主人様の御心を乱すとは……」

何時もとは明らかに違う。俺に対して話しかける時には絶対に使わない、低くて冷たい声。彼女の言う“有象無象”とやらを、敵どころか生物とすら認知していない声。

……あの声は、命あるモノに投げかけるような声じゃない。

相手が俺じゃないと分かりきっていても、まるで背骨に液体窒素で

もぶっかけられたような感覚が襲つ。
口の中に、蛭ヒルやら蚯蚓ミミズやらを大量に無理矢理放り込まれたような不快感。

「……しかし、此れは……ふむ」

「どうした……？」

恐る恐る聞くと、神紅は満面の笑顔を咲かせながら振り向いた。

「あ、御心配をおかけしましたね……御免なさい御主人様。ですが、大丈夫ですよ。」

先程のアレ、どうやら御主人様が標的になったわけではないようです。ていうか、そもそも攻撃でもありませんね。恐らくは……発散、若しくは吸収、といったところでしょうか」

「え……？」

「この先、かなりの霊地があります」

そう言われ、俺は抱えていた地図を凝視した。現在地は（俺の時代で言う）青森県、下北半島しもきたの真つただ中……ん？　まてよ？

下北半島……霊地……まさか……

「おそれざん恐山……？」

思わず言葉に出す。

恐山。霊場とかパワースポットとかの知識に疎い俺でも、名前からいはず知っている日本三大霊場の一つだ。“恐山”といっても、そういう名前の山があるわけではなく、本州最北端の下北半島中央部にある湖、その名も宇曾利湖うそりこを中心とした八峰の外輪山の総称だ。

「オソレザン？ あの霊地の名前ですか。成程、名前通りですね」

「……………どういうことだ？」

「私は骸の血肉を喰らい、怨恨や怨念を同時に喰らってきました。だからわかるんですよ……………」

其処まで言つて、神紅は嘲笑するように顔を少し斜めに傾げた。

「あそこ、恨み辛みが集まっていますよ。霊的磁場のせいではありませんね……………あそこに、恨みを集めているナニカがいます」

俺の知識が正しければ、恐山が霊場として開山したのは平安時代だったはずだ。今がおそらく縄文辺りだから、まだずっと先の話となる。

其処に入ってから、神紅がずっと俺に結界を張ってくれていた。神紅が言うには、周囲の怨念が集まり、濃い瘴気を形成しているらしい。それも人間は勿論、並みの妖怪ですら意識を失い死に至るレベルのヤツだ。毒ガスが漂っているようなものだ。

此の毒ガスも俺の能力で効かなくできるのかは、流石に試す度胸がない。

山を登る。どの山かは知らないが、兎に角瘴気が濃いところへと向かっていった。

俺は何となく興味があった。だから、この場を離れようとする神紅に頼みこんで、此の山を登っている。

何が待ち構えているのか知らないが、何となく気になったのだ。

そして、

「アア……誰かを見るのは、随分と久しぶりだよ……」

ソイツに会った。

瘴気が最も濃い場所……もう紫色の瘴気がバッチリ視認できるほど濃い場所、石が積み上げられただけの場所に、ソイツはいた。

薄汚れた灰色というか鼠色の着物を着た、背丈一五〇センチ程の少女だった。肌も灰色だ。黒い髪を首の付け根あたりまで伸ばし、着物や肌と同じ灰色の瞳が俺と神紅を凝視している。ついでに言うと、素足だった。

が、何より特徴なのは、頭頂部から右斜めに飛び出ている黒い角。長さは三〇センチくらいだろうか。

そして、顔の左半分だった。
真つ黒なのだ。影で暗く見えるとか、怪我をしているとかじゃなく、塗りつぶされたように真っ黒だった。顔の左半分だけが、何かで区切られているかのように。顔の左半分には目も口も無い。いや、見えないだけかもしれないが、少なくとも俺には見えなかった。

「ボクの周囲に近付けるモノがいたなんて……何百年ぶりだろう」

儂げに（若しくは怪しげに）笑いながら立ち上がった少女は、「まア、かけてよ」といって地べたを指差した。

「……………」

神紅が指を鳴らすと、地面から切り株が出てきた。

「どうぞ、御主人様」

「……………ああ、有難う」

取り敢えず礼を言い、腰を下ろす。そんな俺の斜め後ろに控えるように、神紅が立ち……いや、俺に寄りかかってきた。

「ボクは、周りの恨み辛みを集めてしまう体質タチだね。まア、代わり

にそれを喰えるんだけどさ」

「能力か？」

「うん、【恨みを買う程度の能力】。周囲の恨みを集めて喰えば、それだけボクの身体能力も妖力も上がる。当然周囲から恨みを買イ、何をしてなくとも恨まれるんだけど」

あっさりと答えてくれた。

「そういう貴方の後ろのヒトは、ボク以上に恨み辛みを喰ってそうだね。そのヒトに比べれば、ボクの中の恨み辛みなんて蟻の子のよウだ」

「……私に話しかけるな。殺すぞ」

「……フッフ、嫌われるのはなれてるけど、能力に関係なく嫌われたのは初めてだよ」

そう言つて、少女は口元を押さえながら笑った。

「……あ、そう言えば挨拶がまだだったね。ボクは魅恨。ミウラ 唐津風からつなま 魅恨。ミウラ 恨みを買イすぎ、一族から追放された鬼だよ」

こうして、俺は二人目の友達と出逢うことに

なる。神紅に似た、でも少し違う少女、唐津風 魅恨と。

第六話 恨み辛みも好きのうち（餌的な意味で）（後書き）

恐山の設定はあくまで私の妄想を具現化したものです。御注意ください。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第七話 神喰木と恨まれ鬼の間に友情は芽生えない（前書き）

本話は結局魅恨との出会いで終始してしまいました。
早めに更新できましたけど。

第七話 神喰木と恨まれ鬼の間に友情は芽生えない

唐津凧からつなぎ 魅恨ミコウ。彼女曰く、「鬼一族の中でも最古参の一角」らしい。

「……………成程。つまり神紅は能力でボクの中のヤツや周囲の恨み辛みより、何極倍もの恨み辛みエサを内蔵してイるから、この瘴気も平気と言っわけだ。

で、常陸の方はそんな神紅が守護してイるから無事だ……………」と。
何にせよ、久しぶりに他者と会話するのはとても楽しいよ」

「チツ……………私は不快で仕方がないわ。というより先刻さっきから、何御主人様を平然と呼び捨てしてイるの？ おまけに私の名前まで……………」と、何度も言うけど、私を見ないでくれる？」

「そう邪険にならないでくれたまえ。ボクは人肌の温もりに飢えてイるのさ」

そう言っつて、肩をすくめる魅恨。

……………すげえな。あの神紅に臆することなく接してイる。まあ、神紅は迷惑そうだが……………あいつは、俺以外とマトモに話したことが無いから慣れていないんだよな。そのうち、慣れてくれればいいんだが。
……………ふむ。

「ふっ」と

「!?!?」

「!?!?!?」

「あ、あああああああああああああああああああああああ
！！！！？」

ピタリ、と。

魅恨の額に手を乗せる。……ってオイ、そんな急に引くと……
あ、石の上から転げ落ちた。
それと神紅、首に抱きついておるときに叫ぶな。耳がヤバイ。

人肌の温もりに飢えているとか言っていたから、軽くタッチしただけだぞ？

「う、ごうごうごう御主人様あ！？ 何をされているのですか、そんな汚いモノに触れて！！」

「……大げさだなあ。あと、失礼だろうが」

「あの子鬼メスガキなんてどうでもいいんです！！ あ、御主人様の御手手、私が綺麗にしないと」

「こらこらこらこらこら、何俺の掌舐めてのうめようとしてるんだ。頬染めるな瞳潤ませるな熱い息吐くな。……って魅恨、どうした？ 大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ……いやはや、構築されたばかりの信頼関係とイウもの程、アテにならないものは無いね。恥ずかしいことに、ドウにも予測できなかったことが起きてしまった」

両頬に手を添えながら、魅恨はゆっくりと身体を起こした。薄汚れて草臥くたびれた着物が、さらに汚れてしまったように見える。

先刻とは打って変わって動揺したような、驚愕したような表情。相変わらず左半分は見えないが。

……そういえば顔の左半分が見えないのは、神紅も魅恨も同じなんだな。まあ、神紅は髪で隠れているだけだから、完全に見えないわけじゃないが。

……それと魅恨、案外滑舌がいいな。動揺すると口数が増えるタイプなのか？

「コホン！……それで、君たちは何のために此処に来たんだイ？
霊地目当てかい？」

「……………いや、気になったただけだ。此処にいるお前がな」

「へエ、嬉しいことを言ってくれるじゃアないか」

そう言って、口元を歪める魅恨。

「ああ……………。唐津凧 魅恨」

「？ どうしたんだイ？」

俺は立ち上がり、頭を下げた。

「俺と友達になってください」

……御主人様の旅の目的は、友達をつくる事。色々な場所へ行き、色々なモノと出逢い、友達になること。そう言っていた。

本音を言うと、私は其れを快く思っていない。

一つは、独占と嫉妬。私以外に御主人様が“お友達”だと思う存在が在る。想像しただけで、胸の奥でドス黒い感情が沸くのが分かる。一つは、危険だから。

御主人様に付け入り、御主人様を利用しようとしたり騙そうとしたりする下らない有象無象は、今まで幾つも見て来た。無論、全部消してきた。

が、本当に御主人様が心を許してしまえば、私は手が出しづらくなる。私にとって、御主人様の命令や意思は絶対にして至上。

勿論、ソイツが本当に御主人様の害となるのなら……御主人様が懇意にしていようが関係ない。殺す。御主人様に嫌われようとも、私はあの御方のために信じた道を進むだけだ。

そして……

「……………友達、だって？」

目を見開いている子鬼メスガキが、御主人様の害とならない保証など無い。でも、私は御主人様の意向に従う。

「そつだ、友達。俺は友達をどんどん増やしたい。お前みたいなヤツも、友達になって欲しい。いや、お前みたいなヤツだからこそ、楽しくやっていける気がする」

「……………ボクは、一族を追放されたはぐれ鬼だよ？ ボクなんかと関係を持てば、鬼にどんなことされるか知れたものじゃない。最悪縁を切らない限り、君は鬼の敵となってしまう」

「友達に敵味方も善も悪もないだろ？ 唯一緒に笑ったり莫迦したり、たまに助けあったりする関係なんだからさ」

「……………わかった、ウン……………謹んで、受け入れさせてもらうよ」

でも、言いたいことは言わせてもらう。

「……………貴女、御主人様に少しでも迷惑をかければ……………御主人様のお友達になれるという至上の榮譽をふいにすれば、八つ裂きにして晒してあげる、子鬼メスガキ」

「ふむ。……………ならばボクは、精々彼の支工となる程度に努めよう、老樹としまさん」

「

？」

あ

「

？」

ん

この小生意気な下らない有象無象が………御主人様の“支え”
だと？ 巫山戯るな、それは私だけに許された役目。御主人様の下
僕であり、家族であり、お友達一号でもある私のみが甘受すること
を許された幸福。そして、私の存在意義そのものだ。

……何時か、消してやる。

「双方ともに落ち着けて。……んじゃあ、親睦を深めるために、
宴でもしていこうか」

そう言って御主人様は、ぼすとんぱつぐから竹筒に入った酒を取り
出した。

………まあ、子鬼コイツ如き何時でも消せる。今の私が最もすべきこと
は、御主人様に御酌をして差し上げることと、美味しい御飯をつく
って差し上げることだ。

ついでだ。コイツにもつくってやろう。御主人様のより遥かに味の
落ちたヤツを。

不思議なヒトだ。

それが第一印象だった。ボクは恨みを買う。何もしていないのに、性さがというべきか酷く恨まれる。

まあ、そんなものは後付けだ。

皆が恐れたのは……ボクの“力”だ。周囲の恨み辛みを取り込んで、ボク自身が驚愕する程の早さで妖力や身体能力が増していく。怖がられて当然だ。自分の仲間が、目に見える速さでメキメキ力をつけているのだから。

もつとも、この【恨みを買う程度の能力】にも限界はあったらしい。ある日を境に、身体がボロボロになり始めた。急激な成長についていけず、尚且つ喰える恨み辛みの量自体が限界を超えていたのだらう。

だから、山に閉じこもってある程度の餌を集めて、吸っては吐いて、吸っては吐いてを繰り返していた。まあ、御蔭で周囲一帯は瘴気溢れる死界と化してしまっただけだが。

でもまさか、そんな中に乗り込んでくるモノがいるとは思わなかったよ。しかも、唯の興味本位で。

雨う後 常ひたち陸 ボクはその名前を忘れることは、つい片時もないだろうね。ボクの初めての友達で、ボクにとって、色々大きく転換点を与えてくれたヒトなのだから。

一期一会とはよく言ったものだ。あまりにも他者と触れ合っていないか、たせいで忘れてしまっていたよ。出会いというのは印象深さに関係なく、何かを残してくれるものだとはね。

でも同時に、厄介なヒトに目をつけられてしまったよ。長く他者と接触していなかったボクからしてみても、彼女は彼にお熱のようだ。まあボクには、ヒトの恋路を邪魔する趣味は無いよ……今のところはね。

何せ此の思いが恋心に変わらない保証なんて、何処にもないのだからね。しかし仮にそうなったとすれば、ボクは自身の不憫さを呪わずにはいられないね。色々な面で、勝ち目は薄いものだから。諦めが早いとかは言わないでくれたまえ、ボクは自分で言うのも何だが無欲なんだ。固執するモノが殆ど無い。

だが、たまにはそう諦めが悪くしがみ付いたりするのも、悪くは無いかもされないね。

なあ、常陸。君はボクにとって最高の親友になるだろう。其処から先に進むのかは知らないが、今は其れを讃えさせてくれなにかい？ ボク自身、此処まで嬉しいものだとは思っていないかったのだからさ。

まあ、取り敢えずは君達の旅の無事を祈っているよ。

ボクは常陸 君の友達として、それを陰ながら支えさせてもらおうか。

第七話 神喰木と恨まれ鬼の間に友情は芽生えない（後書き）

魅恨さん……常陸の友達二号にして、後になり重要になってくるキヤラです。但し、序盤はそれ程出番がありませんし、常陸との絡みも少ない予定です。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第八話 埋もれた自我は本当の夢を見るか（前書き）

永琳が登場します。此の後は諏訪子や神奈子が登場する予定です。

上から順に常陸視点、神紅視点、永琳視点でお送りいたします。

第八話 埋もれた自我は本当の夢を見るか

魅恨と別れてから三〇年くらい。俺と神紅はさらに本州を南下して行った。

ちなみに魅恨は、もう暫くは恐山に住むそうだ。神紅の能力で鍵くぎらせば、何時でも連絡が取れるし位置もすぐわかる。まあ、神紅はあまり乗り気じゃ無かったから、そうそう滅多に使うことは無いと思うがな。

そんな中、やたらと発展している街、というより都市国家のようなものの噂を聞いて行って見たが、あれは凄かった。

俺の予想では、今は縄文時代の辺りのはずだが、平成の都市圏と変わらぬような街並みが広がっていた。

最初は興味がてら、その街を見学していたんだが、ある日一人の女性に呼び止められた。

八意やごころ 永琳えいりんと名乗った美人の人曰く、彼女は“穢けがれ”について研究しているようだ。

“穢けがれ”は、簡単に言えば罪というかしがらみというか。彼女曰く、その“穢けがれ”を取り払えば、人間も妖怪以上に長寿になれるらしい。現段階では、それはあくまで仮説にすぎないので協力してほしい、とのこと。

永琳さんが目をつけたのは神紅だった。観察眼が凄いいこの人は、直ぐに神紅のトンデモなさに気付いた。

神紅は八百万の神々の怨念や憎悪・血肉を全て取り込んでいる。悪い言い方をすれば、“穢けがれ”の最たる存在だ。

最初は断ったし、怒った。

俺だってキレるくらいはする。神紅をそんな実験材料モルモットまがいな扱いさせたくはないし、そもそも俺は神紅が穢れているなど一度たりとも考えたことはない。

「巫山ふざけ戯んな！！ そんなのに俺らを巻き込むな、勝手にやってろ！！！！」

「……………そう」

残念だ、と言いたげに、白髪美人の永琳さんは目を伏せた。が、直ぐに真摯な顔で此方を見つめた。

「言い方が悪かったわね、御免なさい。でも、私は貴方の家族を侮辱するつもりはないわ。彼女を傷付けるつもりもない。

“穢れ”の無い世界が生まれれば、病気も不幸も何も無い世界が生まれる。私も治療はできるけど、私の手で患者全員を救うことなど不可能だわ。

常陸さん、私の夢を叶えるため、協力してほしいの。赤の他人にこんな事を頼むのも歯痒いし、貴方たちがどれ程迷惑を被るかくらいは想像に難くない。……………お願い」

そう言って、頭を下げる永琳さん。

その時は俺も興奮していたが、あれが心からの告白だということは何となくわかった。

「……“赤の他人”、ね。永琳さん」

「……」

「………神紅、出て来てくれ」

「はい、御主人様」

ズルリ、と音がして、影から這い出してきた神紅は、俺の身体に巻き付くように身体を密着させた。
そして、永琳さんを睨む。

「ヒッ………」

声にならない声をあげ、カウンター席から仰け反る永琳さん。
お偉い方がよく使うお忍び用のバー……俺たち三人しかないその空間で、一気に殺気が充満した。

目に見えるような、濃厚で醗酵し、熟成された殺意。

“天才”と呼ばれ、あらゆる薬を生み出せる医者……俺よりもずっと長生きしている此の人が失神しかけるほど、それは強烈だった。

「……永琳さん。俺たちが出会って、もう二年くらいは経ってるぜ？
“赤の他人”何て言い方、ちよつとどうかと思うがなあ」

「………私が貴方に興味を持ったのは、最初から彼女が目的だっ

「たからよ」

その一言に、殺気はさらに濃厚になる。

汗を流し、ぶつ倒れるのだけは何が何でも堪えている永琳さんを見ていられず、俺は神紅の頭を撫でて落ち着かせた。

「……………それでも、俺は貴女のことを“友達”だと考えてる。貴女とは何度も呑んだし、話もした」

「……………ええ、そうね」

「神紅。頼めるか？」

「愚問です、御主人様」

そう言つて、神紅は永琳さんの顎に指をあて、クイツと顔をあげさせた。その表情は歪んでいる。

嫌々やっているんだろうな。すまん、神紅。

永琳さんより神紅の方が長身だから、永琳さんは顔を上げない限り、神紅の顔を見ることができない。

「それは……………」

「友達の願いだしなあ。偉そうなことを言つても、俺には神紅を説得するくらいしか出来ないが……………非力な身でも、少しくらいなら協力できる」

「……有難う」

深々と頭を下げた永琳さんを、射殺いじろさんばかりの視線で睨みつける神紅をどう諫めようか……そんなことくらいしか、考えられないがな。

其れが、今から一〇年くらい前の話。

“穢れ”。

そんな下らないモノに、興味など無い。

友達からの頼みを断れない御主人様の寛大さに付け込んだこの女は、今すぐ殺してやりたいところだ。

が、この女が御主人様に済まないと思っっていること、そして感謝していることは事実。

そう考えている分、有象無象の中でも頭一つくらいはマシだろう。

自身が穢れていることに、今は感謝すらしている。

その代償として、私は御主人様に出逢えた。御主人様に尽くし、御主人様の敵を一匹残さず平伏させるだけの力を手に入れた。

「……………これは……………」

あの女がでいすぶれいとかいったものを凝視しつつ、震えた声で咳く。

「貴女……………誰なの？」

蒼褪めて、いや、それを通り越して白くなった顔を恐怖と驚愕に歪ませ、おそろおそろ、その女は私を見た。そして、そんなことを聞いてくる。

今、私は布団のような台のようなものに寝かされ、頭に無数の太い管のようなものを付けられている。管はあの女が操作している機械に繋がっていて、ピカピカと光っていた。

「……………どういう意味かしら？ 小娘」

「……………本当なのね。本当に貴女は、数えるのも莫迦らしい数の神の怨念を喰い、取り込んでいるのね」

「何度も言わせるな。こんなことで嘘をついて、一体何の得になる？ 私は御主人様を騙すような真似はしないし、“嘔吐きの下僕”として御主人様の面を汚すつもりもない」

「……そうね、その通りだわ」

女はブルリと震えた。

化け物を見るような視線が突き刺さるが、御主人様以外にどう思われようが、私は気にしないのだ。下らないし、どうでもいい。

「……此れだけの怨念を取り込んだら、自我を保つことなどできなくなるのが普通よ。いや、それよりも真っ先に脳が壊れるわね。“天才”といわれている私の脳でも、恐らく此の怨念の極分の一も耐えられないわ……。」

もう一度聞いて良いかしら？ 貴女は……誰なの？」

「あかはしら赫柱 しんく神紅。御主人様に全てを捧げ、尽くす存在。それ以外に無いわ」

「……本来の貴女、は？」

「ああ？」

「……その貴女は、本来の貴女の上に怨念が堆積してできた……別の貴女じゃあないの？」

おかしい。

おかしすぎる。

彼女の能力が【骸の血肉を喰らい力を得る程度の能力】であることを考慮しても、此れには限度がある。

彼女がトクベツなだけ？ 単に受容量キャパシティが大きかっただけ？

取り込んだ骸や怨念が神のモノ。それも、戦で死んでいった神々の、だと彼女は言っていた。力も怨念も、其れは其処らの人や妖怪の比ではないはずだ。加えて、取り込んできた数もあまりに膨大すぎる。

普通なら、とつくに自我も何も無くなって怨念のままに暴れまわるか、或いは精神が壊れて植物状態にでもなるか……ぐちゃぐちゃになって、多重人格になるか。

彼女は危ういとはいえ、自我を保っている。確かな“芯”を持っていて、力も制御できている。

ありえないことだ。

考えられるのは……今の“自我”が、本来の自我と堆積した怨念により生じたエネルギーと適合した、というもの。

此れも、普通なら考えられない。恐らく大抵の場合は、互いに衝突しあって片方がもう片方を飲み込むか、相殺されて消滅するだろうから。

「……………だから？」

「え？」

神紅さんから声をかけられ、私は思わず返事を返して振り返った。其処には、全くの無表情で私を見つめる、ダークレッドの髪を持つ美女がいた。

「今の私は御主人様の下僕。友達。家族。下らない推論や解析に興味は無いわ。

自分の自我が何なのかなどどうでもいい。私は唯、御主人様の下に仕えるだけなのだから」

「……そ、う」

彼女は……まさか、常陸さんへの忠誠心だけで、自我を繋ぎとめているのだろうか？

それこそ、まさかだ。

第八話 埋もれた自我は本当の夢を見るか（後書き）

三番目の友達は永琳さんでした。

月の都の建設は億単位前という話もありますが、本作では時間軸上、縄文時代からスタートということになります、御了承下さい。

永琳は此処で一旦月に行くため、再登場はかなり先になります。豊姫さんたちは一応主人公勢とは顔見知りです。登場するかもよく決まっていますけど。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第九話 常闇バイキングドリンクサービス付き (前書き)

食事はとっても大切です、の回。
次回、諏訪子様登場予定です。

第九話 常闇バイキングドリンクサービス付き

永琳さんたちが月へ向かう少し前、俺と神紅は都市から出て行った。理由は、永琳さんの研究によって“穢れ”のシステムが解明され、悪い言い方をすれば神紅（と俺）は不要になったこと。そして、神紅と俺という存在自体が、都市の住民や上役の多くから嫌悪されていたということだ。

都市のリーダーで月への移住計画の立案者でもある月夜見^{つぐよみ}さんは俺たちのことを歓迎してくれていたし、友達にもなった。双子の姫とも仲良くなった。市民の中にも、俺たちと仲良くなった人たちは………二人くらいならいた。

が、神紅という“穢れ”の権化のような存在と、その神紅と一心同体である俺を嫌悪したりする人が多いのも事実だ。

神紅が暴れかけたのも一度や二度ではないし、良い機会だと思って挨拶を済ませて出て行った。

永琳さんや月夜見さんは残念そうにしていたが、どの道月にまで付いていく気はない………まだ日本を回ってみたいからな。

何、友達だからな。また逢える時もあるさ。きっと、な。

ちなみに、“一心同体”というのは比喻じゃない。神紅の能力で、俺と神紅の二人を鏈^{くさ}らせる………繋げているのだ。

つまり俺たち二人は、同時に死なない限り死ぬことは無いし、怪我もすぐに再生する………らしい。

神紅曰く「保険」だそうだ。

確かに俺には能力があるが、妖力も身体能力もそれほど高くない。

妖怪という種族は年を喰えば喰うほど力が増すらしいが、俺はまだ一〇〇歳未満……妖怪の基準でいえば“^{ガキ}児童”だ。其れに比べ、神紅は（本人曰く）最古の妖怪にして最初の妖怪。年齢は軽く億を超えている。何しろ、地球も無かった頃から生まれていたのでから。

“繋がる”ということは、そんな神紅の魂の一部が俺の中にも入ってくる……ということでもある。言うなれば、加護を受けた状態。仮に俺が攻撃を受けても、神紅が無事なら俺も死なない。

ちなみに、だからと言って……例えば俺がダメージを受けたからといって、神紅に伝わるようなことは無いそう。逆の場合も同様で、神紅がそこらへんを都合よく調整してくれている。

本当に、あいつの能力は役に立つ。永琳さんからは、俺の能力も大概だと言われたが。

俺の前ではニコニコしている神紅だが、永琳さんによると途轍もなく怒っていたらしい。

「本気で都市の崩壊を覚悟した」とは、永琳さんの談。

俺が悪く言われて怒ってくれるのは嬉しいが、都市一つ滅ぼすようなことに神紅を加担させたくない。

話によると、神紅は身体から赤黒い枝や幹を生やしながら、ブツブツ呟いていたとか。ホラーすぎるわ！ と突っ込んだりしたが、それも仕方がない……よな？

神紅は感情が高ぶると、こっぴどい状態になることがあるらしい。神

紅本人は、此れを「身体が“剥ける”」と言っていた。

“剥ける”……それは、彼女が神喰木としての本性を現すときなのだろうか。

それは、姿なのか、精神ココロなのか……俺には、良く分からない。

山道を歩きながら、足元を見る。其処にあるのは自分の影だ。そして、神紅の影でもある。

中では、神紅が眠っているはずだ。

影の中にも、憎悪に溢れたオーラは少しずつ漏れているのが分かる。

永琳さんの言葉を思い出す。

「彼女の自我は……とつうの昔に消えてしまっているのかもれない」

封印される前、骸を喰い始める前の神紅のことなど、俺はほとんど知らない。

今の神紅の自我は何なのか？ 八百万の怨念に塗り固められて壊れた自我なのか？ それとも、誰か別の神の自我が成り替わったモノなのか？

わからない。

が、わかることはある。神紅は俺を慕ってくれている。そして、俺と友達になってくれた。

なら、信じるしかねえだろ。

神紅がどんな危険な存在だろうが関係ない。俺が、神紅を止める鎖となつてやる。
あいつには何時も助けられてばかりだからな。それくらいはしないと、バチがあたるというものだ。

「 助けるからな、神紅」

口から声が零れる。

影の中からは、何の反応もない。恐らく聞こえていないだろう。

最近、というより俺が封印を解いてからは、神紅は殆ど“食事”を摂っていない……と思う。

少なくとも、俺は見たことが無い。

“食事”。つまり骸を喰らうこと。神紅は普通の食べ物も食べられるが、それで妖力が増すことも無い。

節約するためには、頻繁に睡眠をとる必要があるそうだ。もっとも、神紅の妖力や神力はほぼ無尽蔵に近いのだが。

本人はそう言つてた。

夜。

あの都市は夜でも明るかった。でも、此処は漆黒の世界だ。私は影から這い出し、洞窟の中で寝息を立てている御主人様を見下ろす。

御主人様の下には、真つ赤な葉が何千枚も敷き詰められている。私が御主人様が寝るとき、用意しているものだ。妖力が込められているから、極寒の中でも快適なはず。御主人様曰く、くっしょんというものらしい。

小さく寝息を立てている御主人様の御顔を見ると、自然と喉が鳴る。でも、身分不相応にも寝ている御主人様に襲いかかるような真似はしない。

それよりも、することがある。

外に出ると、涼しい夜風が私の髪を摩なかせた。しかし、私の心は晴れない。自ら御主人様から離れていくのだ。気分が良くなるわけではない。

でも、それでも嬉しさがこみあげてくる。

「……………助けるからな、か」

御主人様は小さく呟いただけのつもりかもしれない。でも、私の耳にはしっかりと響いていた。

“寝ていた”といつても、御主人様に下らない有象無象が集れば、すぐわかるようにしてある……………浅い眠りだ。

「私は、御主人様の前に跪くことしかできない憐れな下僕……なの
に、御主人様は……」

やっぱり、お優しい。

こんな私を、救おうとしてくださるのだから。
なら。

「私は、御主人様に捧げ尽くすだけ」

息を吐く。

「何時までも、何処までも」

そのためには……まだまだ、力が足りない。
もっと欲しい。もっとケガりたい。そして、御主人様に尽くしたい。
両手を広げ、足から“根”を伸ばす。身体から“幹”や“枝”を出
す。
感じる妖気から察するに……此の周辺にいる妖怪は、小物ばかりか。
其れは別にいい。最初から期待などしていないし、“塵も積もれば
山となる”……と御主人様が言ってた。

癪なのは、その一部が此方に近付いていること。御主人様に惹かれ
ているのだろう。格好の餌だから。

……下らない。全く下らない。

餌なのは、貴様ら有象無象共だ。

「取り敢えず、全滅させると御主人様が訝しく思うだろうから……
一万匹くらいでいいか」

ペロリ、と鮮血よりも紅い舌で舌なめずりをずる。御主人様がカントーと呼んでいた地域一帯に伸ばし、準備完了だ。

「……………じゃあ、喰うか」

殺して、刻んで、足元に持ってくる。

封印される前は、私は骸だけを喰ってきた。でも、今はもっと貪欲に。骸が無ければ、骸を増やせばイイ。

御主人様を護るためには、力がいる。世界中の神を一瞬で始末できる力……その程度では、到底足りない。

屑程度の力しかない雑魚妖怪でも、数億くらい喰えば、少しは力が増すだろう。

本音を言えば、御主人様以外の全てを喰い尽くしたい。でも、御主人様の目的は大勢の友達をつくること。だから、纏っている空気や匂いで“素質”がありそうな奴らは敢えて見逃している。

鬼や天狗などの、数も影響力も多い妖怪も見逃す。誰かに悟られることなど決してないようにしているが、万が一にも風評が広がり、私の主である御主人様が敵視されることを防ぐためだ。

もし敵視するようなら、勿論殺す。が、御主人様は傷付くだろう。そんなことは許さない。

足元が切り分けられた骸と色々な色の血で飾られていく。地面に染み込んだ血は、一滴まで根が啜いきる。そして、私の伸びた幹や枝から、無数の口が飛び出した。標的は、小山よりも高く積み上げられた骸。

「……………」

どんどん無くなっていく骸。一万匹分など、二分もあれば腹に収まる。おまけに大して膨れもしない。何より、

「……………不味い」

今までは、こう感じることもなかってなかった。

八百万の神々の骸だろうが何だろうが、美味しく感じたことも、不味く感じたこともなかった。

そもそも、自分に味覚があることに気付かなかった。

でも、御主人様と触れ合ってから変わった。

初めて御主人様とキスした時、頭を殴られたような衝撃に襲われたのを良く覚えている。

美味しい。

初めての感覚なのに、頭の中はその言葉で埋め尽くされた。

御主人様の唇、頬、指……何もかもが、途轍もなく美味しく感じた。

その代わり。

御主人様以外の全てが、途轍もなく不味く感じるようになったのだ。それこそ、骸から水、果実に至るまで。勿論、それを表情おもてに出すほど拙い真似はしないが。

水たまりのようになっていた血を両手で掬い、一口飲む。

「やっぱり、不味い」

それも当然か、と思う。御主人様のお味と、有象無象共の味が同じなわけがない。

それでも、此れは必要なこと。必要な苦痛。

吐き気を催すような不味さに耐えながら、私は有象無象の骸を喰い尽くしていった。

第九話 常闇バイキングドリンクサービス付き (後書き)

神紅の成長は止まりません。主人公は彼女の鎖となれるでしょうか……。

次回、諏訪子との出逢い編。もとい死亡フラグ編。予定では、ですけど。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第一〇話 木に狙われた蛙（前書き）

諏訪子様登場回。でも、最後にちょっと出てくるだけです。導入部分が長すぎました……。

第一〇話 木に狙われた蛙

ゆっくりのんびり旅を続けて、いつの間にか神紅と逢って一〇〇年以上経った頃。漸く列島の真ん中を超え、諏訪地方辺りへとやって来た。

「……なあ、神紅」

「御主人様？ 何でしょう？」

まるで蛇か何かのように俺に身体を纏わりつかせている神紅を見ると、神紅は微笑んでさらに強く抱きついてくる。身体は浮かせている状態だから重くないし、歩くのも邪魔にならない。本当に、そこら辺りは気の回る奴だ。

……その神紅が、何故か物凄く不機嫌そうになっている。いや、顔は笑顔なんだが、憎悪のオーラがいつもより多く出ている。此れの矛先が俺だったら、とっくに心臓麻痺を起こしているだろう。

「……一体、どうしたんだ？ 随分と機嫌が悪そうだが」

「……………嫌な臭いがします」

「へ？」

唐突に、ぼそりと呟いた神紅は、少し表情を歪めた。

「……濃くなってきました、神の気配が。近くにいます……それも、そこそこの」

“神”。

人間、妖怪、妖精 e t c e t c それら全てとも隔絶した存在。本来なら、他種族を遙かに凌ぐ圧倒的優位性を持つ存在。

大妖、大妖怪と呼ばれる妖怪でも、下級の神にすら及ばない。但し、例外というモノはある。

それが、神紅。

曰く、「神の“天敵”」。八百万の神の神力や怨恨を飲み込んできた結果、神に格別の憎悪を持つようになり、その戦闘能力が“神殺し”に特化してしまったそうだ。そもそも彼女が喰ってきた神は、今の神よりも総じて能力が高いらしい。そう考えると、彼女が神など鎧袖一触できる力量を持っているのも素直に頷ける。

何しろ彼女が喰ってきた憎悪は、“神々による神々への憎悪”なのだから。

祭壇。祠。ウツハ

湖の近くに、それはあった。この時代の建築物の基準から考えると、かなり大仰で繊細に作り込まれている。信仰心を集めている証拠だろう。

深紅の説明によると、“旧神”、つまり“楽園”に住んでいた嘗ての神々と違い、“新神”は一部の例外（つまり次元が違う連中）を除いて人間の信仰が基盤となる。信仰を集めれば集めるほど、神格が上がって神となりやすいし、神力も増える。

“信仰”を集める手っ取り早い方法は、信者を増やすこと。必然的に、人口が多い地を納めている神に信仰が集まりやすくなる。無論、信者たちに見返り……という失礼だが、まあ、加護とかを与えることも怠ってはならない。

神力は妖力や霊力より遥かに強力で応用性も高いエネルギーである分、その確保が色々面倒なのだ。

「……御主人様、本当に行くのですか？」

「ん、ああ。挨拶しなかつたらそれはそれで問題だろうしな……やつぱり、マズイか？」

俺に強く抱きつき、念を押すようにちよいと強めの口調で話し始める神紅。

「私、目の前に神が現れたら……何をするか、わかりませんよ？^{ユリ}神も、私のことは知っているでしょう……いきなり攻撃をしかけてくるかもしれませんよ？」

あ、でもそのときは、ちゃんと私が御主人様を護りますからね。かすり傷一つつけさせません。御主人様の能力が利かなかつた場合、ですけど。そして、御主人様に手を出せば……ソイツ、生かしてお

あ、ヤバイ。

熱に浮かされたように、死人より青白い頬を朱に染めて熱弁をふるう神紅。

そう、これは別に珍しいことじゃない。

そして、此れがさらに激しくなると……

「愛しています愛しています愛しています御主人様あ！！　どうかどうか私に愛させてください。身分不相応の思慕を抱くことをお許しくください。愛させてください尽くさせてください捧げさせてください縋りつかせてください。」

嫌なら引き離してください、こんな惨めで最低な、御主人様の慰み者にもならない不出来な下僕に御仕置きしてください……………」

ますます強く抱きついてくる。ヤバイ、此れ以上力を込められると……と思うのだが、どういうわけかそういう力加減は絶対に間違えない。我を忘れてるように見える。無我夢中エクスタシーの状態のように見える。が、そう見えているだけで心の何処かは冷静な状態だ。

だから、本当にヤバイのは今じゃない。ヤバイのは

「はあ……………御主人様あ……………」

「近すぎだつて、離れる……………だつから、そういう風に突然キスして

くるな　　むぐっ」

「ん……はふ……む……れうるっ……」

その後だ。いつものスキンシップとかじゃない。本気で俺を取って食おうとしている雰囲気を纏った、ヤバイ状態。マジで喰われる。深紅に染まった舌が口の中に入り込んでくる。わざとらしく音を立てながら、蹂躪してくる舌。

……って、やられてる場合じゃねえ！！

「コラ、離せっ……言ってるだろうがああああああああああああッ！」

「きゃんっ！」

大きく腕を振り払うと、神紅は尻もちをついた。涙目で尻をさすりながら、神紅は謝罪の言葉を述べる。

彼女が本気で俺から離れるつもりがないなら、俺如きが闇雲に腕を振り回したところで解放されるわけがない。

つまり、最初っから俺の言うことを無視する気はない、ということだ。

にも拘らず、抗議の意味を込めた涙目を向けるのは……こいつ特有の誘惑術だろうか。

……言つとくが、俺は加虐性愛者^{サディスト}じゃねえぞ。

しおらしく地べたに座り込んでいる神紅の頭をパシンと叩きつつ、

祠の周囲を見渡す。

神力が濃厚なのか、それとも元日本人のDNAによるものか、何処となく神聖な雰囲気を感じられる。

「なあ、神紅。こここの神様は何処にいるんだ？」

頭をさすりながら身体をくねらせ悶えている神紅は、朱に染まった顔をあげてキヨロキヨロと周囲を見渡した。

「……来ないですね。せつかく怨嗟のオーラを振りまいて、誘っているのに」

「……………おい」

額にチョップを入れる。

「むきゃんっ」

「お前、本気で殺しにかかる気か？」

「御主人様が逢いにわざわざ祠くんたりまで来たのですよ？ 寧ろ向こうから出て出迎えるべきでしょう。……………まあ、下らない塵に最初から其処まで期待していませんが、せめてすぐ姿を現すべきだと思ひまして。……………呼んでやったのですよ」

「……余計警戒するんじゃないか？」

「此の程度、警戒するに値しません……此れから先、ソイツが味わうかもしれない地獄に比べれば、桃源郷のようなものです」

すました笑顔でフツと笑う。こういうとき、やたらと色気を感じるのだから困る……。

「……じゃあ、出てくるよ。お望み通りにね」

と、耳を震わしたのは……神紅ではない、けれど恐らくは女性の声。能力を発動し、神紅をチラリと見る。

憎悪と怨嗟と怨恨を鍋でとことん煮込んだようなドロドロした黒い瞳が、目の前に現れた少女を見つめた。

小柄な身体には不釣り合いな、高くて大きな帽子。山吹色の髪と瞳の少女。

……神様、か。

「諏訪の地にようこそ……と言っておこうか、“神喰木”。この洩^も矢^{りや} 諏訪子、この地を統括する神として、そして国の王として、お前たちを歓迎しよう」

露骨に警戒心を露わにしている神様は、そう言って目を細めた。

第一〇話 木に狙われた蛙（後書き）

プロット通りに上手くないかないものです。て言うか書いていくうちに神紅のセリフがどんどん増えていつてこつなってしまうた……そして、結局諏訪子編も分割することに。
ホントに神紅が自重してくれませんか。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第一一話 天敵Ⅱ 最狂>最悪(前書き)

諏訪子ファンの皆様、御免なさい。

以上です。

まあ、この先どうなるかは……不憫になりそうです。

第一一話 天敵「最狂」最悪

「神喰木」。新神わたしたちや一部の妖怪の間では有名な話さ」

湖の傍にある洞窟。その中に案内され、松明の光が照らす空間に浮かび上がる背丈に似合わぬ程高い帽子の少女
洩矢もじや 諏訪子すわこ
と名乗った神様。

「一応、私もこの辺りの土地神を総括する立場にあつてね、そういう噂には耳聡い……。おまけに、私の専門は崇りとかだからね。そういう負の力には敏感なんだ」

そう言つて、さして面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

神様の眼前には、神紅が敷いてくれた葉のクッションの上に正座する俺。そして、その背後から俺に抱きつきながら、鋭い瞳で神様を睨む神紅。

「神喰木」。吸血木の最上位にして、世界最古の妖怪。通常の吸血木なら、旧神一体取り込めばそれだけで限界を迎え、最悪“破裂”する。

にも拘らず、神喰木は八百万の旧神の骸をほぼ全てを喰い尽くした……その木を封じた、最後の旧神を除いて」

吸血木は、戦場跡に生える木の妖怪とされている。無念にこの世を去った亡者の骸と魂、血を喰い尽くし、成長を遂げる、血に染まっ

たような真つ赤な木だ。

“最後の旧神”と聞き、神紅の顔が露骨に歪んだ。苦虫を百匹噛み尽したような顔をし、小刻みに震える。

「最後の旧神……」

「私のように、土地神や局地信仰などから生誕した神……つまり“最後の旧神”から直接産まれたわけでもない神たちも、聞いたことくらいならある。

その旧神は其々の“世界”における母神（最高神）における神々を産んだ直後に力尽きたそうだ」

昔話を語るかのように、静かな口調で話す神様。その目は儂げに憂いでいるようだった。

「こつ見えても祟りを管轄している身。あんたを差別する程器が小さいつもりもない……が……諏訪王国の、私の地に害を齎すのなら……此の私が始末する。……民を除く、全てを引き換えにしても」

しかし、その表情は一変する。真剣、そして強い決意に満ちた目だった。

思わず息をのみ、咄嗟に身体を仰け反らせる。

……が、それが良くなかった。俺の身体には今、神紅が抱きついている。だから、俺が仰け反ったことは……簡単に知られた。

「 笑止の至り」

瞬間、洞窟が丸ごと消滅した。

目の前が真っ白になった。

え？ 何が、ナニガ起こった？

気が付くと、私の身体から全ての感覚が消えていた。……かのように思えた。

「 あ、あぐっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!? 」

でも、それは間違いだった。

激しい痛み。全身を熱した鉄棒で貫かれたような痛み。 気絶するこ
ともできないほどの痛みだった。

痛い、痛い痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛いイタイイタイイタイイタイイタイ……!!!!!!!

頭が覚醒し、頭が急速に回転し始める。視界が鮮明となる。その時

漸く、私は自分がうつ伏せで倒れていることに気付いた。
咄嗟に頭に手をやるが、どうやら帽子は吹き飛んでいないようだ。
ついでに、血も流れていない。

……え？　じゃあ、此の痛みは何だ？　首を曲げ、身体を見てみる。
着ている服は何時も通りだ。若干汚れているが、鮮血に染まって何
かいやしない。

そしてふと周囲に視線が向き

私は絶句した。

「……………な！？」

綺麗な草原が、おどろおどろしい黒に染まっていた。黒煙が上がり、
嫌な臭いを放っている。

そして　湖。私の神力に欠かせない、綺麗な湖の一部が、真
つ黒に、汚泥よりも黒くなっていた。ドロドロとなった湖が、ゴポ
ゴポと泡立っている。

そんな地獄絵図を呆然と眺め、立ち上がることすらできなかった。
いや、立ち上がる力も残されていなかったのかもしれない。

「……………があっ！？」

背中に激しい痛みと衝撃。顔を上げると、そこには深紅に身を包ま
れた長身の女の姿が。

神喰木だ。

確か、赫柱^{あかばしり} 神紅^{しんく}と紹介されたはずだ。

其処まで思い出して、漸く現状を把握する。私はうつ伏せになった状態で、目の前の女に背中を踏み躪られていた。

途端に湧き上がる怒りと羞恥。そして、得体の知れぬおぞましさ。

……ナニが起こって、こんなことになった？

こう見えても、私は一国の王だ。民の信仰を一身に受け継ぎ、其処らの神とは比較にならぬ信仰心を得ているという自負があった。

神が得ている信仰心は、そのまま力量を意味する。

そんな、まさか、私は……。

疑問符が浮かんでは消えていく。機能し始めた頭が、思考が、認識が、再び混沌の果てに突き落とされていく。

「自分の現状が、信じられない？」

上から降って来た、とんでもなく冷たい声。今まで逢ったどの神とも、それこそ天照アマテラスなどの大神と逢った時でも感じたことのない……圧倒的存在感に力。そして……声の、冷たさ。

ブワツと。全身から嫌な汗が噴き出る。思わず震えそうになる身体を残った自尊心で必死に押しとどめる。

「あ……く……」

口を開けても、漏れ出るのは嗚咽と音にすらなっていない蚊の鳴く声以下の声のみだった。

「……下らない。笑止を通り越して、唾いが出てくるわね」

嘲る声色に、私は反論すらできなかつた。いや、睨み返すことすらできない。

「……貴女、もしかして刺し違える覚悟なら、私に一太刀ひとたちくらい浴びせられるとでも思ってるの？」

何気なく尋ねるような声は、凶星だつた。

神の“天敵”。そう呼ばれ、神々からは疫病のように恐れられている存在。風の噂では最近になって封印が解かれたという、生ける悪夢。

それが私の領地に踏み込んだことを確認した時、私は死を覚悟した。旧神は総じて、新神わたしたちより実力が高いと言われている。その旧神の骸を八百万喰い尽した存在……弱い相手とは到底思えない。

それでも、民を護るため、配下の土地神たちを護るため、そして、神としての自尊心を護るため……只で殺されてやるつもりはなかつた。

最悪の場合、刺し違えても

。

「下らない。貴女、とんだ戯け者ね」

しかし、そんな私の覚悟を、冷たい声は打ち砕く。

「天敵」という言葉の意味を、理解していない」

“天敵”。この二文字の言葉に、此れだけ恐怖を覚えたことは無かった。

「天敵」というのはね、死ぬ気でかかれば倒せるかもしれない相手ではないのよ。

……絶対に、確実に、完璧に、どんな法則がねじ回り、どれ程貴女に運が向いても、私が実力の一割も出さずとも、貴女が身体の限界を超えた本気力を発揮しようとも、神に祈ろうとも、天を呪おうとも、自身の非力さと悲運を嘆いても、何億何兆の仲間を頼ろうとも、絶対に一撃も浴びせられない相手のことを言うの。

……いえ、“相手”ですらない。貴女は

そう言って、彼女は足を大きく振り上げた。

「只の、“餌”よ」

ああ、死ぬんだ。

そう思って、私は静かに目を閉じた。

「……やめる」

「御主人様………」

そろそろ始めるか……そう思って振り上げた足を、私は止めた。振り返ると、其処には御主人様が立っていた。その御顔は、とても焦っていて……怒っているようにも見えた。

血の気が一気に引くのが分かる。もう、こんな下らない有象無象のことなど、頭の中から吹き飛んでいた。

御主人様の命令は絶対だ。

私は御主人様の前で膝を折り、腐った地面に視線を向けた。暫くして漸く、御主人様が腐った地面の上に立っていることに気付いた。慌てて私はこの地と時間を鏝くまらせて時間を巻き戻し、草原と湖を元に戻す。

「……落ち着いたか？」

「はい、申し訳ありません」

頭は最初から冷静だったが、御主人様の言うことは全て正しい。御主人様がそう仰るのなら、私は冷静では無かったのだろう。

「出すぎた真似をいたしました。この屑が御主人様を仰け反らせるという無礼を働いたため、つい熱くなつてしまいました……」

「有難う」

小さく頭を下げた御主人様は、真剣な表情で私に近付いてきた。

しかし、御主人様に「有難う」と言われた私は舞い上がり、歓喜の叫びをあげるのを必死にこらえていた。

そんな私の耳元に、御主人様の顔が近付く。

「神紅。此の神様は、崇りを統括しているおかげか……俺たちを、それ程嫌悪していないように思える。此の神様を通じて、他の神様と仲良くできるかもしれない」

「……わかりました」

御主人様は、神ともお友達になりたい……そういうことか。

なら、私のすべきことは、只一つ。

足元の有象無象を眺めながら、私はほくそ笑んだ。御主人様に褒め

られる光景を思い浮かべて。

第一一話 天敵「最狂」最悪（後書き）

神紅の設定上、神様キャラの扱いがこうなってしまうのは仕方がないのです、申し訳ありません。原作キャラを死なせるつもりはありませんので。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第一二話 神様対談実行中（前書き）

諏訪子とのお話編です。

次は神奈子様登場……させられるといいかなあ、という感じで。

風邪をひいてしまい、少しテンション低めです。ゆっくり更新していきます。

第一二話 神様対談実行中

御主人様に無理を言っ、目の前の神と二人きりにしてもらっ。

「ねえ……其処まで警戒しないでくれると有難いのだけど」

「……あんなことしといて、良くそんなこと言えるものだよ」

「神様だったら、あれくらい受け流す度量が欲しいわね」

「……で？ 如何したってこんなことになるわけ？」

先程より硬さが抜けた言葉遣いで、投げやりに言う神 まどろっこしいから蛙女でいいか。蛙女と私は、平らな石の上に正座し向かい合っている。

御主人様は外で散策に出ているはずだ。勿論、何かあれば即座に駆け付けられる。

「こんな？ それは貴女を痛めつけたこと？ それとも、今、こうして向かい合っていること？」

「前者の方は分かる、能力だろう？ 私が聞きたいのは後者の方」

「神にも分らぬことがあるのね」

皮肉交じりに言うと、目の前の神は小さく鼻を鳴らした。

「当然、あるともさ。そもそも人間の信仰を必要としている時点で、神が万能ではないという証だ、そうだろう？」

「ええ。私も万能ではない」

「へえ？ そうなんだ。ちなみに聞いても？」

「御主人様が死んだら、私は生きていけない。その瞬間に死ぬでしょうね。……御主人様に害悪を与えた、その全てを滅ぼしながら」

其処まで言つて、私は肩をすくめた。

「死人を生き返らせることもできなくはないかもしれないけど、それを御主人様に試す気にはなれないし……。まあもつとも？ 私がそうやすやすと御主人様を傷付けさせるわけもないけど」

「……だろうね、身をもって体験したよ」

そう言つて吐き捨てる、苛立たしげに坐り直した蛙女は、やたら目立つ帽子をかぶり直しながら私を三白眼で見つめる。

「貴女が悪いのよ。御主人様に危害を加えようとするから。……御主人様は“能力”で危害を与えられなくできるけど、確かかどうか

は分からない。そして、神の一撃をまともに食らえば御主人様は…
…無事では済まないだろうから」

「……脅し、というのは大切だよ。脅迫していると自分が自覚し、
相手がされているという自覚がなければ……祟りというモノは成功
しにくい。祟りを司る“ミシヤグジ様”を束ねている私としては余
計にね。……まあ、私の能力自体は【坤こんを創造する程度の能力】で、
祟り神というよりは土着神を総括している、と言った方が良く
だけども」

“坤”。確か“地”を意味する言葉だったはずだ。……成程、地を
操る……」

「別にイラナイか……もう、持……持っているし……」

「ん？ 何か言った？」

「いや、別に」

一瞬沸いた喰欲シヨクヨクを鎮め、小さく首を振った。
御主人様の意向に逆らってまで、喰いたい餌カミでもない。それに、御
主人様を傷付けようとした神など……反吐が出るほど不味いに決ま
っている。幾ら本能が骸を求めていようとも、簡単に抑えることが
できた。

「質問に答えると……御主人様の目的のためよ」

「目的？」

「御主人様は、お友達を求めてる」

「友達……妖怪が？」

「……妖怪は、欲に生きている。理性の皮をかぶっていても、本能でね。食欲、殺人欲、支配欲、戦闘欲……それと同じように、御主人様は“お友達”を求めているの。家族でも知人でもない……お友達を」

「……変わっているね」

チクリ、と。頭が一瞬沸騰する。でも、大丈夫だ。此れくらいならまだ抑えられる。

まだまだまだまだマダまだマダまだマダまだマダまだ、抑えられる。憎悪も今は邪魔だ。黙ってる。

此れは侮辱でもない。唯の感想。そう、だから。五月蠅い黙ってるそして死ねくたばれ腐ってしまえ……。

湧き出る殺意を押しとどめる。

やはり、御主人様の仰ることは至言だ。熱くなっていた。私は熱くなっていたのだ。

だから、まだ完全に落ち着いてないから、此の程度の言葉を聞き逃すのにも此れだけ苦労する羽目になるのだ。

「でも、御主人様には私がいる……。私は、特に神からは忌み嫌われる存在。

私としては、これで御主人様に無用な輩が近付かなくて助かっているところもあるけれど、御主人様は、なるべく多くのお友達が欲しいと思っっている」

「だから、私に友達になれ、と？」

「違っわ」

首を振って、蛙女を見つめる。

喋るうちに、漸く頭が冷やされてきた。

「私が頼むことによつて生まれる藁よりも脆い友情など、元より御主人様には不要だわ。

……唯、御主人様を悪く思う神が多すぎるのも最早必然」

「まあ、確かにね。全ての神が受け入れるとも思えない。私はもとより土着神だし、おまけに祟りを総括する者だ。神喰木とは似ていない事もない」

「……その虫唾の走る発言は一先ず置くとして、私はさり気無く、御主人様の悪い印象を払拭してほしいのよ。勿論、無理にやれとも率先してやれとも言わないわ。元々大して期待もしてないし」

「……神に其処まで横柄に頼むのは、あんたくらいだよ」

ため息をつき、蛙女は後頭部を搔いた。

「……まあ、わかったよ。一応あなたの主さんは私を信仰してくれているみたいだし、信仰には加護を、だ。それくらい、手を貸してやってもいい」

「え？」

御主人様がコイツを信仰している……？ まさか。

「……有象無象の屑が、御主人様にナニカしたの……？」

「ち、違っつて！！ あいつ、基本的に私を含めた神様全員に、あの程度の信仰心をもっているんだよ！ 私のは直接逢ったからか、少し多いけどさー！！」

「ある程度って？」

「まあ、一般的な民衆と同じくらいかな。信者より少なく、無礼者よりは多い程度」

「ああ……」

そのくらいなら、まあわかる。
要は普通なのだろう。

「まあ、そんな理由は建前で……あんたを敵に回したくない、というのが本音だね」

「気が合うわね、私も貴女を餌テキに回したくないわ」

不味そうだから、と心の中で呟く。

「……そう。それじゃ、改めて挨拶をしようか。」

……この関係が友情で結ばれることを祈って」

「神も、祈るのね」

「祈るともさ。人間と違って、縊るモノがないだけで」

「諏訪子様……でいいでしょうか？」

「敬語はいいよ。あんたの後ろの神喰木が怖いし」

「そっか、でも、諏訪子様と呼ばせてもらっぜ？」

「様付けで呼ばれて困る事は無いからね、構わないとも」

諏訪子様と再び向かい合い、二度目の挨拶を交わす。今度は、一度目よりフランクだ。

神紅が何をどう話したのかは知らないが、少しは信頼された、ということだろうか？

神様の不信を買っても、メリットなど一つもない。此処は素直に喜んでおくべきだろうな。

「先程もちよいと言ったが、私は此処……諏訪王国の国主も務めている。大したものだろう？ この地に住まう神の中でも、そこそこの有力だと自負している」

「国を挙げての歓迎、ということか？」

「私だけだけどね、迎えるのは」

そう言つて、大きな帽子を揺らしながら何々大笑している諏訪子様を見て、俺の肩に顔を乗せている神紅が不快気に顔を歪めた。その頭を撫でて落ち着かせながら、諏訪子様に尋ねる。

「諏訪王国の先はどのような様子だ？」

「先？ 北より来たあんたたちから見ての先か。あそこ辺りは私も

知らないね。

何しろ山霞のようにぼやけていて知れたものじゃない。風の噂では、神同士が信仰を巡って争っていると聞いている。大きな軍勢が、神を叩き潰して取り込んで進軍しているそうだ」

「進軍？ 物騒な話だな。この辺りは？」

「此処は私を除いて有力な神はいない。

あんたも北から来たならわかるだろう？ 北の神共は、争いにはとんと興味がないときた。まあ、かくいう私もそうなんだが」

「だが、じきに来る」

「だろうね。まあ、私もあっさり軍門に下る気はさらさらないさ、下せる気なら、攻めて来てみればいい……まあ、あんたたちが敵に回らなければ、だけどさ」

「自ら神様に矢を向けるほど、酔狂な趣味はしてないつもりだが？」

「そう祈ってるよ」

そう言って、諏訪子様は再び呵々大笑した。

第一二話 神様対談実行中（後書き）

諏訪子と少し仲良くなりました。まだ友達ではありません、少し気を許した知り合いのようなものです。

諏訪子もまあ神様ですし、敵対しないと分かれば露骨に警戒したりすることもないでしょう。

ある種の諦観も入ってますが。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

第一三話 救いは腐って土に還らず腹の中(前書き)

諏訪大戦編と神奈子様登場編。

実際は、神紅大暴れ編です。

第一三話 救いは腐って土に還らず腹の中

「何、使者が来た？」

諏訪子様と出逢った次の日。朝一番に、諏訪子様は微妙な表情で話しかけて来た。

「うん、大和やまとの神々のね。簡単に言うと、“降伏か死か”の二択を突き付けられたよ」

「それはまた……難儀なことで」

「愚かね」

俺の肩を揉んでくれていた神紅が、呆れたように目を細めた。

「神って、人間以上に強欲なんじゃないの？」

「神だって、欲望の一つや二つはあるものさ」

「……諏訪子様は？」

「睡眠欲、とか」

冗談なのか本気なのかイマイチわからない事を言っ、ケタケタ笑う神様を見る。

……失礼だが、能天気すぎないか？ いや、神が恥も外聞もなく慌ててる方が問題かもしれんが。

「で？ どうするんだ？」

「無論、迎え撃つ……土着神を嘗めるとどうなるか、その身にわからせてやるさ。大和の神々とやらにね」

「……そうか」

俺は神紅を見て、立ち上がった。追従する形で、深紅も立ち上がる。

「じゃあ、俺は御邪魔かな？」

「少なくとも、水を差して良い話じゃあないしね。勿論、終わったらまた来てよ。歓迎するからさ」

終わったら……か。

死ぬ気はない、ということだな。

「誓って。俺は約束を反故にしない主義だからな」

「フフ……んじゃ、ちょっと体を馴らしてこようかねえ……」

銭湯にでも出かけるような気軽さで、諏訪子様は外に出ていった。

……諏訪子様、此処、貴女の家なのですが……。

「神紅、どうする？」

「どうするもこうするも……此処はもうすぐ戦場になります。そんなところに居たって意味無いですよ……骸を喰うなら、もっと離れていても問題ありませんし」

「……喰う、のか？」

「あれば。まあ、出来るでしょうけど」

事も無げにそう言う神紅を見て、小さく息を吐く。
でもまあ確かに、俺が諏訪子様につくのも変だし、ついてもいない部外者がいることも変だ。

此処はさっさと退散するか……観戦するかの一択が妥当だろうな。

「神紅、ほとほと余熱が済むまで離れていようか」

「はい、御主人様」

何故か嬉しそうに、神紅は笑った。

もっとも、その笑いがすぐに凍る事になるとは……俺も予測できなかった。

「……おいおいおいおいおいおいおい……」

人間、いや妖怪は、いざパニックになると言語機能がおかしくなるらしい。
目の前には、様々な武器を持った一見人間……しかし、何処となく神々しい気を纏った連中が構えている。ざっと、一〇〇〇人……いや、万に届くかもしれない。

「貴様、諏訪の者か……別働の戦力を用意しておいたとは、猪口才な」

リーダー風の男が怒りと嘲笑の混じった声で、そんな風に聞いてくる。

……二人を四、五桁の数で囲い込むのは猪口才じゃないのか？
などと言いかけるが、当然、口には出さない。

「……何で、大和の軍勢と鉢合わせになるんだよ……」

頭を抱えなくなった。

そう、諏訪王国から一時離れ、俺と神紅はより南……愛知の方に向かったのだ。

敵が諏訪子様を軍門に下すことが目的なら、軍を引き連れ諏訪に向かうはず。諏訪、つまり長野県中部に攻めるには、岐阜辺りから乗り込んだ方が手っ取り早い。

だから南下してやり過ぎそうとしたってのに……。

まさか、連中は軍を分けて挟撃でもする気だったのか？ 神つてのは、もつと馬鹿正直に乗り込んでくると思っていたが……とんだ誤算だ。

そして……何より……。

「有象無象が……何の権利があつて、御主人様に刃を向けるの？」

神紅が、超キレてる。

「おつかしいなあ……一言主殿いちごうだまお、わたしやどうも、あの小僧を攻撃する気が起きないと言いますか……警戒はしているんですか、如何も身体が動かないというか……」

「おぬしもそう感じるか、どうやら能力のようだのう……」

リーダーっぽい奴は、一言主と呼ばれているようだ。

……ん？

一言主……一言主神い！？

あの、葛城山かつらぎやまの、一言で吉凶を決める力を持つとされる神のか！？
おいおい、どんだけヤバイ奴が来てんだよ！！！！

……あ、勿論俺は能力を発動させている。

それでいて、神紅はとんでもない憎悪のオーラを放っており、近付き難い様子らしい。

そんな理由で、俺と神紅は大軍に囲まれつつ、一触即発のままだ。

「……神紅、あの神、まずいぞ。本当に一言主神だったら……俺でも知ってるメジャーな神だ。注意」

「確かに、不味そうですね」

「え？」

「……御主人様を集団で取り囲むような、塵なんて」

そう言つて、神紅は腕を大きく振つた。

瞬間、周囲の神がまとめて消し飛んだ。

……え？

はい？

ちよつと待て、え、あ、神が？

「纏めて、腐つてしまえ」

ドン、と地鳴りが響く。周囲の木々や地面が、急激に腐って黒くなり、ドロドロになり、消えていった。神たちも、消えて……はいなかった。

地面からダークレッドの根のようなものが無数に生えて、吹き飛んでいった万近くの神達を一世に突き刺した。

そして、その根から口のようなものが伸びて、瞬時に喰らい尽くした。

もう、あれは“喰う”というより、“消す”と言った方が良い表現だ。

……マジかよ。

俺も妖怪だ。大量にいた連中は雑兵扱いだろうが、紛れもなく其々が神だ。力量くらいわかる。

当然、妖怪よりも次元が遥かに上の存在だ。そんな連中が、まるで雑魚か何かのように……。

「なっ!?!?……ば、莫迦な……総大将たる八坂やまか殿からお預かりした軍勢が……。

そ、それにこの妖力……いや、神力か!? 何という禍々しさよ……!?!?!」

一言主神が蒼褪め、慌てて構えを取る。

「小癩な、しかし我が【吉兆を決める程度の能力】には」

「へえ、イイモノもっているのね。……それ、貰うわ」

「は……!?!」

それは、一言主神の声だったか。はたまた、俺の声だったか。

気がついたら、一言主神の目の前に、深紅がいた。

ズドン。

そんな轟音とともに、吹き飛ぶ血肉。消し飛ぶ骨。

一言主神の心臓を、神紅の指先から伸びた鋭い枝が、貫いていた。

其の儘、神紅の身体から伸びた無数の枝や幹、根が一言主神を捉え、潰した。

「が」

グシャ、バキ、ゴキユ、メキヤ、ゴキン……。

そんな音とともに、潰した枝屋何やらの隙間から血が噴き出し、流れ出た。

それすらも、地面に刺さった神紅の根が、吸い尽くしているようだった。

今の神紅は、背中から伸びた二本の太い根を支えにして宙を浮いていた。

其の儘空中で、一言主神を喰らい尽くしていく。

神紅は、嬉しそうにするわけでもなく……何処までも、無表情だった。

た。まるで、息をしているかのように自然と、餌を喰っていた。

「これが……神喰木………」

諏訪子様が警戒するわけだ。

今まで、こいつの非常識なところはいくつも見て来た。だが、これは……凄まじすぎる。

それでも腰が抜けなかったのは、結局は何もできなかった俺のけなしのプライドだったのだろうな。

その後、諏訪王国まで戻ってみると、何故か諏訪子様と長身の美女が酒を酌み合っていた。

「……おう！ 常陸、御無沙汰」

「数日くらいしか経ってないが……御無沙汰、諏訪子様。そっちは大和の総大将の八坂様ですか？」

「ん？ ああ、確かに私が八坂やまか神奈子かほこだ。あんたの話は聞いているよ？」

「……一言主を倒したのかい？」

「……ええ、私の友達が」

「其れは其れは、大したものだ。あいつは一応私の部下ということになってはいるが、力量は私と大差ないからね」

ニヤリと笑う八坂様は、値踏みするように俺と、俺の影を見た

「その中に、いるというわけかい」

「……ええ」

「そつかそつか。」

「いやいや、本当に傑作だな！！ あの疫病の如く恐れられている神喰木が、まさか一人の妖怪の子分になっていようとは。聞いた時には耳を疑ったが……まさか本当だったとは！！！」

呵々大笑しながら、バンバンと胡坐あぐらをかいている膝を叩く神を尻目に、俺はため息を吐いて寢床に向かった。

「ん？ どうした？」

諏訪子様が小首を傾げて聞いてくる。

……なんだか日に日に、打ち解けて来ている気がするな。

「諏訪子様、俺、寝ます」

なんかもう、ドツと疲れた。

「そつかい。……勝敗は聞かないんだね」

「下ったんだろう？ 軍門に」

「……大見栄きつといて、面目ない」

「まあ、いいんじゃないか？ 兎に角、寝てくる」

「ん、こっちは飲み明かすつもりだもんで、気が向いたら顔を出しなよ」

「おうよ、常陸とやら、後でまた話そう」

二人の神に背を向け、俺は歩き出した。

第一三話 救いは腐って土に還らず腹の中（後書き）

神奈子は、神紅の主である常陸に興味を持ったようです。

御意見や御感想があれば、御遠慮なくどうぞ。

・一言主神

日本書紀及び古事記に登場。大和（奈良）の葛城山の神。“悪事も一言、善事も一言”で実現できる神とされる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7762w/>

東方友造録

2011年10月30日00時44分発行